オンラインで創っていく、ものがたり

狐の嫁入り屋敷

阿賀北ノベルジャム 2021

アーカイブ・ガイドブック
～阿賀北への招待状～

ひとりではできないことも、みんなと一緒なら。
仲間と出会えたからこそ生まれる作品は、
どれもみずみずしく、きらきらと輝いていました。
物語を作るだけがゴールじゃない、
“ここから始まるんだ”というワクワクが止まりませんでした。

❖阿賀北ノベルジャム2021 グランプリ授賞式 総合司会❖　株式会社南日本放送 報道局報道部　坂元 楓

阿賀北ノベルジャム ONLINE 2021

アーカイブ・ガイドブック

～阿賀北への招待状～

もくじ

はじめに

主催者挨拶／敬和学園大学長　山田　耕太……4
共催者挨拶／新発田市長　二階堂　馨……5
共催者挨拶／聖籠町長　西脇　道夫……6
主催者挨拶／阿賀北ノベルジャム二〇二一（担当教員／実行委員長／プロデューサー）　松本　淳……7
阿賀北ノベルジャム二〇二一を振り返って／運営学生リーダー　一野　諒也……8
阿賀北ノベルジャム２０２１　イベントスケジュール……10
阿賀北ノベルジャム２０２１　決算表……11
阿賀北ノベルジャム２０２１　受賞作ならびに副賞……12
あなたの作品が「聖地」をつくる!?……13

作品

宵闇の盃……21
『宵闇の盃』チーム感想……36
あがのあねさま……39

『あがのあねさま』チーム感想……44
オン・ユア・マークス……45
この距離を噛みたい……51
『オン・ユア・マークス』『この距離を噛みたい』チーム感想……55
Mが助けを待っている……59
『Mが助けを待っている』チーム感想……65
コンコンこちら手の鳴る方へ……67
『コンコンこちら手の鳴る方へ』チーム感想……70

おわりに

審査員講評／審査委員長　仲俣　暁生……72
審査員講評／審査員　間狩　隆充……74
審査員講評／審査員　鈴木美和子……78
審査員講評／デザイン審査員　加藤　雅一……82
審査員講評／PR販促審査員　渡辺　安之……86
運営学生感想……89

ご挨拶

敬和学園大学長　山田　耕太

敬和学園大学は、新潟県阿賀北地方の中心地、新発田市と聖籠町にまたがってキャンパスがある人文系の四年制単科大学です。「阿賀北」とは新潟県で阿賀野川より北の地域を指す言葉です。この辺りには北緯三八度線が走っています。奈良時代の始めまでは阿賀野川が大和朝廷と蝦夷（えみし）の国境となっていました。阿賀北は仙台の多賀城辺りと同じように、淳足柵（ぬたりのき）、都岐沙羅柵（つきさらのき）、磐舟柵（いわふねのき）という古代城柵があった歴史的ロマンの溢れる辺境の地でした。

敬和学園大学はそこで文学による地域振興と文学の新しい書き手の発掘を目的にして「阿賀北ロマン賞」の活動を二〇〇八年から二〇一九年まで十二年間続けてきました。その上で「阿賀北ロマン賞」をリニューアルした文学創作イベント「阿賀北ノベルジャム」を始めて、早くも三年目を迎えました。「阿賀北ノベルジャム」は「阿賀北ロマン賞」の趣旨である、地域振興と文学の新しい書き手の発掘という目的は変わりません。しかし、その手法をまったく刷新して、ノベルジャムの開催方法に準じることにしました。すなわち、著者と編集者とデザイナーでチームを組んで短期間で集中して出版にまで至るという手法です。

ノベルジャムとしては初めての地方開催で、しかもコロナ禍の中でのリモート開催となりました。二泊三日の合宿形式の制作過程がオンラインでの二、三カ月の協議と制作に変わり、当初予定していた現地訪問も感染症予防の観点からなくなりました。それでも第一回、第二回を合わせて十一作品が誕生しました。第一回グランプリの『バッテンガール』と第二回グランプリの『宵闇の盃』をはじめとして、全十一作品が出版され、販売されています。

今年度も阿賀北ノベルジャムに参加していただく著者・編集者・デザイナー・審査員の皆様、ならびに協力スタッフや運営実行委員会の皆様を始め、共催の新発田市・聖籠町、協賛の地元企業・法人、後援の地元自治体・教育委員会・報道各社の皆様に対して、心から感謝の言葉を申し上げます。今年度も地元の地域社会の皆様に愛される作品群が生まれることを心から願いつつ、ご挨拶に変えさせていただきます。

阿賀北ノベルジャムオンライン二〇二一授賞式挨拶

新発田市長　二階堂　馨

本日、栄えある阿賀北ノベルジャムオンライン二〇二一授賞式の開催を心からお祝い申し上げます。

わがふるさと阿賀北地域を舞台にして、すばらしい感性で地域の魅力を小説で表現していただいた皆様にまずもって感謝申し上げます。

さて、毎年、宮中行事のひとつである「歌会始」において今年も県内高校生の作品が2首選ばれました。

〝窓の外を見たら心が楽になった。これからも広い視野で物事を考えたい気持ち〟を詠んだ「窓の外見たつて答へはわからない少し心が自由になれる」、もうひとつは、〝感染禍での不安な気持ちと雨の日の窓が重なった心模様〟を詠んだ「雨続く教室の窓水滴が一つになつて加速していく」の2首です。

新型コロナウイルス感染症はまだまだ先が見通せない、暗いトンネルの中に入っているようでありますが、若者の感性がキラリと光り、トンネルの出口を照らしてくれているようにわたくしは感じました。

わたくしは、これからのまちづくりは若者の感性や感覚が大事であると確信しており、日ごろから若者の意見に耳を傾けていかねばならないと思っております。

その思いから、これまでも敬和学園大学の学生の意見を傾聴する機会を与えていただいており、そのたびに素直に若者のパワーと思いを感じ、また新たな視点や発想をもらうことができています。これも敬和学園大学が開学以来、地域に根ざした人材育成を進められ、当市との連携が深まっている成果であると感じています。新発田を思う志の高い人材を育てていただいている大学の皆様に感謝いたします。

これまでも当市において開催する様々な事業や催しに、学生が積極的に参加することで、敬和学園大学は地域に親しまれてきました。また、新発田にとどまらず、近隣市町村の催しにも賛同いただくなど、今では阿賀北地域にはなくてはならない大学となっております。

これからも新発田の魅力、阿賀北地域の魅力を私たち行政や大学はもとより、本日御参席の皆さんとも一緒に発信していきたいと考えております。

結びに、ここにお集まりの皆様が今後ますます御活躍されますこと、そして皆様の御健勝を祈念いたしまして挨拶とさせていただきます。

お祝い

聖籠町長　西脇　道夫

阿賀北ノベルジャム授賞式が開催されますことに、心からお喜び申し上げます。本来であれば直接お祝い申し上げるべきところでありますが、出席できず誠に残念です。受賞された皆様方には心からお祝い申し上げます。今後も、阿賀北ノベルジャムが地域の魅力発信となりますよう、ご祈念申し上げお祝いのメッセージといたします。

主催者挨拶

阿賀北ノベルジャム二〇二一担当教員（実行委員長／プロデューサー）　松本　淳

二回目の開催となった阿賀北ノベルジャム二〇二一は無事、三チーム六作品が完成しました。

今回の全体テーマはＳＤＧｓを掲げ、そこから今年度はじめて審査員となって頂いた鈴木美和子先生からも案を頂き、「姉」というお題で阿賀北を舞台とした個性豊かな作品が生まれています。ぜひ、電子書籍・オンデマンド出版を通じて手に取って頂き、お楽しみください。

昨年に引き続いてのオンライン開催となりましたが、コロナ禍も三年目に突入し、参加者・関係者の皆さまの各種ツールへの習熟度が高まってきたこともあり、制作過程や完成作品を見ても「地域の外の視点を入れて物語を作り、地域の魅力を再編集する」という本イベントの目指す姿がより明確になったように思えます。

一方で、せっかく完成した作品やこの取り組みが、肝心の地域の皆さまにまだまだ知られていない、という点は課題です。今年度は「オンライン書評バトル」という新たな挑戦を行い、TikTokでの書評動画をTwitterで紹介したところ、十万回を超えるインプレッション（表示回数）を得るなど手応えもありました。今後もオンライン上での認知をいかに地域で暮す方々に浸透・拡大を図るか、イベントそのものの運営と並行して取り組んでいきたいと考えています。

小説を作り、出版するという言わば伝統的なメディア展開と、オンラインツールを活用したコラボレーションでそれを生み出し、認知を拡大していくという新しい取り組みへの挑戦を並行して行うのが阿賀北ノベルジャムです。参加者の皆さまの努力はもちろんのこと、運営学生メンバーとも何十時間にも及ぶ打ち合わせと準備を重ねて来ま

した。学生リーダーの一野さんはじめ学生運営メンバーも大変な苦労があったと思います。ぜひこの濃密な経験を今後に活かしていってもらえればと考えています。

このような新しく多層的な取り組みが、コロナ禍のなかでも開催してこられたのは、共催・協賛を頂いている皆さまのご支援あってこそです。改めて感謝致します。また、運営にあたっては、大学事務局の皆川さんに1年間を通じてサポートを頂きました。審査員の皆さまにも作品審査のみならず、イベントの方向性についても貴重な示唆を頂いております。多くの皆さまに支えて頂いているからこその阿賀北ノベルジャムです。3年目に向けて更なる充実を図ることで、それにお応えして参りたいと思います。

阿賀北ノベルジャム二〇二一を振り返って

阿賀北ノベルジャム二〇二一　運営学生リーダー　一野　諒也

本年度で二回目の開催となった阿賀北ノベルジャム。一回目の昨年度は新型コロナウイルスの影響もありバタバタと走り抜けましたが、本年度はその経験もあってなのか比較的余裕を持って運営出来たのではと思っております。

実は私、阿賀北ノベルジャムの立ち上げ当初から関わっていました。昨年度、本年度とオンライン形式で実施してきた阿賀北ノベルジャムですが、当初は参加者の方に阿賀北へお越し頂いて二泊三日の合宿形式で実施するという計画を立てていました。新型コロナウイルス感染症の感染状況が中々落ち着かないここ数年ではありますが、コ

ロナ禍が落ち着きましたら、作品を片手に阿賀北ノベルジャムの舞台である新潟県阿賀北地域へ是非お越し下さい。

最後になりましたが、阿賀北ノベルジャム二〇二一を暖かく見守って下さった関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

また阿賀北ノベルジャム二〇二二に向けて実行委員会もアップデートしてまいります。来年度も暖かく見守って頂けますと幸いでございます。

阿賀北ノベルジャム 2021　イベントスケジュール

日　　程	イ　ベ　ン　ト
８月28日	ローンチイベント
10月13日	開会式
11月７日	プロット発表会
11月28日	初稿発表会
12月19日	完成稿発表会
12月20日	BCCKS･プロモーションセミナー
２月26日	阿賀北ONLINE書評バトル
３月19日	グランプリ発表会

阿賀北ノベルジャム 2021　決算表

(1)　収　　入

区　　分	決　算　額
町事業負担金	250,000
自　己　資　金	473,254
そ　の　他	1,000,000
計	1,723,254

(2)　支　　出

区　　分	決　算　額
受賞者賞金、賞品	267,288
印刷製本費	201,287
選考委員等報酬	805,946
広　報　費	297,000
旅費・交通費	634
通信運搬費	32,472
諸　雑　費	118,627
備品購入費	0
計	1,723,254

阿賀北ノベルジャム 2021　受賞作ならびに副賞

◯グランプリ（10万円）

茶山日縁様『宵闇の盃』（チーム山米茶文庫）

◯デザイン賞（５万円）

伊藤柊果様（チームミルスケール）

◯販売促進PR賞（４万円）

チーム山米茶文庫

◯特別賞（５万円）

ギア比４：１「オン・ユア・マークス」（チームミルスケール）

◯参 加 賞

◉お米５キログラム（JA北越後 様より）

◉TSUKIOKA BREWERYクラフトビール３本セット（TSUKIOKA BREWERY 様より）

あなたの作品が「聖地」をつくる!?
アガッキー
阿賀北地域を舞台にした小説書いてみたいな
そんなキミには「NovelJam」がおすすめ!
この土地の魅力を伝えたい!
作家志望の学生さん
編集者、デザイナー、著者がチームとなって作品を作り上げる!
Three-man cell!
デザイナー
編集者
著者
プロの意見が直接聞けちゃう
感動した…!
面白い!
出来上がった作品は電子書籍や紙の本で日本中の読者に届く!
小説の舞台を巡る旅
こんなブームも来ちゃうかも!?
新発田まつり
頭取
頭取
後
村上
イヨボヤ会館
MAP
瓢湖の白鳥
狐の嫁入り
未来の流行につながる作品、生み出してみませんか?
阿賀北で聖地巡礼

© 藤沢チヒロ

阿賀北ノベルジャム2021グ…
阿賀北ノベルジャム2021グランプリ授賞式が行われました！
阿賀北ノベルジャム実行委員会
3月19日（土）に阿賀北ノベルジャム2021グランプリ授賞式が対面＆オンラインのハイブリットで行われました。その模様をご紹介いたします。
目次

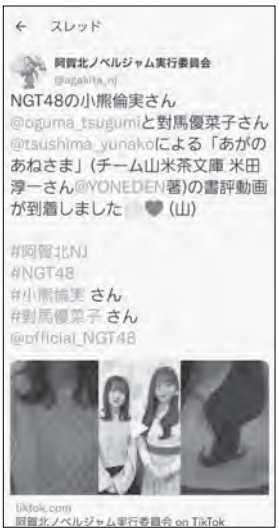
【阿賀北NJ運営日誌】小説…
【阿賀北NJ運営日誌】小説家綾崎隼先生が特別ゲストとして参加！綾崎隼先生特別公演・参加説明会が開催されました！
阿賀北ノベルジャム実行委員会
8月31日（土）に阿賀北ノベルジャム特別公演・参加説明会を開催しました。
Zoomを使ったオンラインでの開催となりました本

6作品が遂に完成！阿賀北ノ…
6作品が遂に完成！阿賀北ノベルジャム2021完成稿発表会が行われました！（2021/12/19）
阿賀北ノベルジャム実行委員会
12月19日（日）に阿賀北ノベルジャム2021完成稿発表会がオンラインで開催されました。その模様をご紹介いたします。
当日の様子はYouTubeにて公開中！下記の動画リ

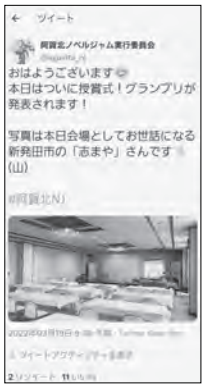
スレッド
阿賀北ノベルジャム実行委員会
@agakita_nj
阿賀北ノベルジャム2021グランプリ授賞式が行われました！｜阿賀北ノベルジャム実行委員会
@agakita_nj #note
note.com
阿賀北ノベルジャム2021グランプリ授賞式が行われました！｜阿賀北ノベルジャム実行委員会…
2022年04月25日 2:37 午後 · Twitter Web App
ツイートアクティビティを表示
2 リツイート 6 いいね
阿賀北ノベルジャム実行委… · 4月25日

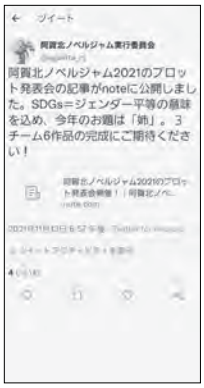
スレッド
阿賀北ノベルジャム実行委員会
@agakita_nj
本日の新潟日報にて、グランプリを受賞された茶山日縁さん
@sayama_hiyoriのお写真とコメントが掲載されています
受賞作「胃腸の盃」についても紹介していただきました！（山）
#阿賀北NJ
niigata-nippo.co.jp
阪和大・茶山さんがグランプリ｜新潟日報デジタルプラス
2022年03月28日 3:39 午後 · Twitter Web App
ツイートアクティビティを表示

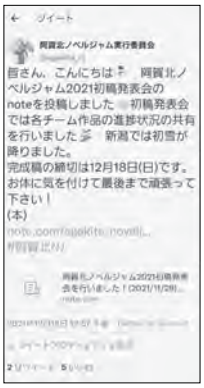
スレッド
阿賀北ノベルジャム実行委員会
@agakita_nj
先日行われた「阿賀北ONLINE書評バトル」の模様が公式YouTubeにアップされました！（山）
#阿賀北NJ
ANJ2021書評バトル youtu.be/aTB6LxObdQA @YouTubeより
阿賀北ノベルジャム2021「お題」
姉
2022年03月05日 2:48 午後 · Twitter Web App
ツイートアクティビティを表示
13 リツイート 2 引用ツイート 28 いいね

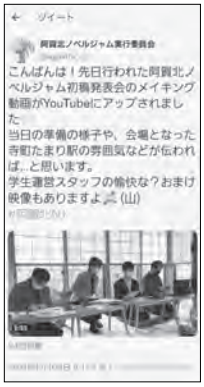

スレッド
阿賀北ノベルジャム実行委員会
@agakita_nj
NGT48の小熊倫実さん
@oguma_tsugumiと對馬優菜子さん
@tsushima_yunakoによる「あがのあねさま」（チーム山米茶文庫 米田淳一さん@YONEDENN著）の書評動画が到着しました（山）
#阿賀北NJ
#NGT48
#小熊倫実 さん
#對馬優菜子 さん
@official_NGT48
tiktok.com
阿賀北ノベルジャム実行委員会 on TikTok

Twitter・BLOG









ニュースレター
Vol.2
この距離を噛みたい
青闇の歪
あがのあねさま
からおすすめの1冊！

阿賀北ノベルジャム2021「お題」
姉
狙い→SDGsの目標の1つ「ジェンダー平等」から、地方における女性のおかれた立場や未来について
物語として光を当てたい。

授賞式・書評バトル

m
芳晴

広域連携について
SANJO
PUBLISHING
阿賀北
ノベルジャム
ふくいsdgs
女子部
Noveljam
(HON.jp)

阿賀北ノベルジャム ニュースレター Vol.1

オンラインで創っていく、ものがたり

発行日：11月29日（月）

2021年度の参加チームと作品内容をご紹介！

（写真：プロット発表会の集合写真）

阿賀北ノベルジャムとは･･･
阿賀北を舞台とした「著者」「編集者」「デザイナー」がチームを組み作品の制作から出版･プロモーションまで行う小説ハッカソンです！

NHK「新潟ニュース６１０」に取り上げられました！

〇チーム名「チームミルスケール」

著者	プロット概要
刀木	とある特殊能力を持つ主人公。その能力が学校の姉的存在である生徒会長と共鳴し物語が進んでいきます。
ギア比4:1	「挫折と停滞、そして再生」が物語のテーマ。無職の主人公は就職浪人を乗り越え再生を決意していきます。

〇チーム「爆撃バッハ。」

著者	プロット概要
冬暗オワリ	阿賀町の行事でもある「狐の嫁入り」を題材に、ジェンダー平等や性的マイノリティについても含んだ作品です。
ハギワラジュンタ	「社会に与えられる役割を全うする」をテーマに、職業選択の自由のない世界で、「M」をという謎のキーワードと主人公がいかに変わっていくのかを描く作品。

〇チーム「山米茶文庫」

著者	プロット概要
米田淳一	SDGsの目標が達成されないまま2029年を迎えた世界で、阿賀北実験都市という架空の都市を舞台に女性型ロボット三姉妹を主人公に進んでいくSF地方コミカル架空戯記ホームドラマです。
茶山日縁	明治時代後期を舞台に、覆面女性陶芸作家である主人公の弟との反発や苦悩、女性としての社会進出の壁に立ち向かう姿が描かれます。

阿賀北ノベルジャム公式Twitter

公式YouTubeで各イベントの模様も公開中！

主催・運営：阿賀北ノベルジャム実行委員
https://agakita-noveljam.com
敬和学園大学 教務課　TEL:0254-26-2514

ニューズレター

阿賀北ノベルジャム
オンラインで創っていく、ものがたり
ニュースレター
Vol.2
発行日：2022年1月17日（月）
ぼくたちの、そして「阿賀北の未来」がここにある！
全体テーマは「SDGs」。ジェンダー平等＝「姉」をお題とした6作品が完成！
ここから
読めます！
コロナ感染対策の為、イクネスしばたでのパブリックビューイングは行われません。オンラインにてご参加ください。
『死にたがりの君に贈る物語』の綾崎隼先生をゲストにNGT48メンバーがTikTok書評バトラーとして参戦。「阿賀北ONLINE書評バトル」2月26日（土）開催！
私たちもノベルジャムの「推し本」をプレゼンテーションします！ 見に来てね！
無料・要事前申込
グランプリ（最優秀作品）・各賞は3月19日に新発田市の「志まや」にて発表予定。詳しくは公式サイトで→
主催・運営：阿賀北ノベルジャム実行委員
https://agakita-noveljam.com
敬和学園大学 教務課　TEL:0254-26-2514

阿賀北ノベルジャム
オンラインで創っていく、ものがたり
ニュースレター
Vol.3
発行日2022年3月31日
「　阿賀北ノベルジャム2021」
グランプリは『宵闇の盃』
茶山さん　グランプリ
阿賀北ノベルジャム2022受賞作品
○グランプリ：
茶山日縁『宵闇の盃』
○デザイン賞：
伊藤柊果『オン・ユア・マークス』
○販促PR賞：
チーム「山米茶文庫」
○特別賞：
ギア比４：１『オン・ユア・マークス』
※新潟日報（3月26日）より抜粋
その他の完成作品はこちらから
（試し読みも可能です）→
2022年度実行委員会
メンバーを募集します！
小説だけでなく、メディアや出版業界に興味のある方や、阿賀北地域の企業に関心のある方も将来につながるかもしれないイベントです！
一緒に小説で阿賀北を盛り上げましょう！
連絡は学生リーダー 三浦王暉まで
20k062@keiwa-c.ac.jp
主催・運営：阿賀北ノベルジャム実行委員
https://agakita-noveljam.com
敬和学園大学 教務課　TEL:0254-26-2514

2021 年 12 月 23 日 新潟日報　新潟日報社提供

掲載日：2021年12月23日，面名：下越，記事ID：K1J20211223_M0016001006A173008

(c) 新潟日報社

読んで満身の小説6作

阿賀北ノベルジャム オンライン発表会

著者と編集者、デザイナーがチームを組み小説を創り上げる「阿賀北ノベルジャム」の作品が出そろい、発表会がオンラインで開かれた。参加者は阿賀北地域を舞台にした自らの作品を「正月とクリスマス向けの娯楽大作。ぜひお楽しみに」などとアピールしていた。

小説を通じ同地域の魅力発進や文学の向上などを目的に、敬和学園大（新発田市）が主催し2回目。参加者は10月から制作に取り掛かり、約2カ月で脱稿。今回は6作品がノミネートされた。

発表会は19日、新発田市の寺町たまり駅で敬和学園大の学生が司会を務め、参加者や審査員とオンラインでつなぎ開かれた。

阿賀町の狐の嫁入り行列を題材にした作品や、新発田市の近未来を描いたSFもの、中条高校を舞台にした学園ミステリーなど多様なジャンルの小説が紹介された。

参加者は「文字数を絞り込み、洗練されたものになった」「家父長制の中で姉弟愛を絡めた葛藤を描いた」などと、小説の特徴をPR。審査員からは「阿賀北の地域性にどれほどクロスするのか分からないが、読むのが楽しみ」といった声が寄せられた。

6作品は24日からネット上で販売される。作品の質のほか、参加者は会員制交流サイト（SNS）でのPRにも努め販売実績なども審査の対象となり、来年3月にグランプリ作品が決定する。

オンラインで開かれた阿賀北ノベルジャム作品発表会＝新発田市諏訪町2

2022 年 2 月 6 日
新潟日報　新潟日報社提供

掲載日：2022年02月06日，面名：下越，記事ID：K1J20220206_M0016001006A173001

(c) 新潟日報社

チームで創作 阿賀北ノベルジャム」2回目

プロ作家のような体験

オンライン形式 編集者が助言

Sunda ズームアップ

著者と編集者、デザイナーがチームを組み、阿賀北を舞台にした小説を創り上げる「阿賀北ノベルジャム」2回目を迎え、初回よりも多いの作品が完成。現在審査が進められている。作品を通じ地域の魅力を発信するだけでなく、編集者との作業を通じ「プロ作家のような体験ができた」と話す参加者も。小説を志す人は一度参加してみてはいかがだろう。

（新発田総局長・柳沢雅之）

阿賀北ノベルジャムは敬和学園大（新発田市）が主催。阿賀北の魅力を伝えることが条件で、小説は新発田や胎内市などが舞台となる。2022年度の第1回グランプリ作品、村上高校の女子高生を主人公にしたバンテンガール」。作品はネット販売が主だが、バンテンガールは音楽、村上市内の一部書店でも販売された。

著者と編集者、デザイナーのチームで小説を創るノベルジャムは国内では、NPO法人「ニコスモ」（東京）が手掛けたという。都内などで行っているが、敬和大に導入したのは同法人初事業でもある。松本教授（49）＝同法人理事＝も参加し開催したいとの声が寄せられ、松本さんが敬和大勤務となったことから実現での開催となった。

仕掛け初は、参加者が会員として作品を創作を完成したが、新型コロナウイルス禍と重なり、チーム内のやりとりはオンラインとなった。作品の初稿や完成原稿などもオンラインで実施。運営は実行委員会の学生たちが手掛けている。

松本さんは主応を感じつつ、「オンライン空間では、「この感覚度を高める。一期一会の出会いを、中なる地元愛を、ローカル文化の新創造へ」と、また、この存在が知られていない。

今月末には小説の「書籍バトル」を開催。ノベルグループ「NIM-46」のメンバーも参加予定。20年度末のPRに力を注ぎ、知名度アップを図っている。

1回目では実行委の学生リーダーを務め、今年度は著者として参加している茶山日穂さん（23）は、「面白いと思ってもらえるのか、物語として成り立っているのか不安だった」と話すが、編集者からアドバイスをもらったり「ちゃんと物語になっている。このまま書きましょう」と励まされたりして自信を付けたようだ。

昨年参加した新潟市出身の高橋郁一さん（48）は、締め切りに追われたことも編集者とのやりとりで、「アマチュア作家がプロ作家のような体験ができた」と感謝を話す。

一方、編集者の立場から参加した日高さんは、企画から参加、編集、デザイン、発売までを約期間で味わえ、小説出版の楽しさ、エキサイティングさを学ぶ機会として魅力を話す。

作品の質はどうなのだろう、審査員長を務める文芸評論家の伊藤氣帆さん（51）は「長期のノベルジャムセッションの間に編集やデザイン、山場がなされるため、ある程度の水準を備えている」と評価する。

一期一会の出会いを、中なる地元愛を、ローカル文化の新創造へ」と、また、この存在が知られていない。

今月末には小説の「書籍バトル」を開催。ノベルグループ「NIM-46」のメンバーも参加予定。20年度末のPRに力を注ぎ、知名度アップを図っている。

第2回グランプリ作品は来月決定する。

「阿賀北ノベルジャム」のホームページ

「第2回阿賀北ノベルジャム」の6作品

2022 年 3 月 26 日
新潟日報　新潟日報社提供

掲載日：2022年03月26日，面名：下越，記事ID：K1J20220326_M0016001006A173002

敬和大4年

茶山さん グランプリ

阿賀北ノベルジャム 丁寧な描写評価

筆者と編集者、デザイナーがチームを組み、小説を創り上げる「阿賀北ノベルジャム」の2021年度グランプリ作品に、敬和学園大4年の茶山日穂さん（23）＝新潟市中央区＝の「宵闇の盃」が選ばれた。茶山さんは「私だけでなくチームの力。本当にうれしい」と喜びを語った。

阿賀北ノベルジャムは敬和学園大が主催。20年度に始まり、2回目の開催。文学の振興と小説を通じた阿賀北地域の魅力発信が狙い。参加者は昨秋、2カ月程度で制作し、6作品が出そろった。完成後も販売促進やPRに努め、審査員長を務めた文芸評論家・伊保暁生さんは「登場人物が多く、それぞれのキャラクターを描き分けている。一人一人の魅力、関係性も丁寧に書いている」と評価した。

茶山さんは「書いていて、これでいいのかずっと悩んでいた」と振り返り、「これからも書く事を続けていきたい」と意気込みを語った。

特別賞には「オン・ユア・マークス」のギア比4：1さん（31）＝新発田市＝、デザイン賞に同作品の伊藤梓栗さん（20）＝新潟市秋葉区＝、販売促進PR賞は「宵闇の盃」のチーム山米茶文庫が選ばれた。

「宵闇の盃」は明治時代の新発田が舞台。陶芸の世界に生きる女性が、社会の偏見や圧力に負けず、陶芸家として自立していく様子を描いている。

授賞式は19日、新発田市内でオンラインにより開催。審査員長を務めた文芸評論家・伊保暁生さんは

阿賀北ノベルジャムのグランプリに選ばれた茶山日穂さんと作品の「宵闇の盃」

(c) 新潟日報社

宵闇の盃

茶山日縁

宵闇の盃

茶山日縁

プロローグ

陶芸家・津崎紅山はこの明治日本を代表するとまで言われた陶芸家である。大きな巌のようでありながら粋な華やかさを忍ばせる、そんな作風には多くのファンが付いた。

今日も今日とて紅山に弟子入りしたいと願う青年が来たが、紅山は一言「弟子はとっていない」と言い放つのが常であった。そして、そんな気落ちした者たちに茶を出し送り出すのは私の役目だった。

「やはり紅山先生は弟子をお取りにならないようだね」

「えぇ、そのようで」

小さな応接間でお茶とお茶うけを出す。今日のお茶うけは銀杏の葉を模した上生菓子だ。

聞けば青年は瑞雪門下らしいが、どうにも反りが合わずに紅山の門を叩いたらしい。青年は頬の古傷を撫でて目を伏せた。

「先生なら私の作品を理解していただけると思ったんだけどなぁ。どうして駄目なんだろう。君、えぇと……」

「五十嵐千代です」

「あぁそう。君、どうしてか分かる?……いや、分かる筈もないか」

青年は上生菓子を口に放り込むと緑茶を啜った。

「分からないと言えば〝紅千〟だ。最近東京の方でも名を聞くようになったが、紅山先生の作風を継いでいると言うじゃないか。蒐集家の間では紅山が弟子をとったんじゃないかってもっぱらの噂だよ」

曰く、紅千作品は最近蒐集家たちに見い出されたが、調べてみれば個人蔵の小さな展覧会など細々とした所に見られていたようだった。持ち主に聞けば「骨董市で買った」「人が貰っていた物をまた貰った」などとはっきりしない。また、これらは必ずしも紅千の印が入っていた訳ではないが、作品が出回るにつれて作品の癖などから紅千の初期の作品なのではと噂する輩もいるという。

「そうなんですか」

「そうとも。弟子でなかったら勝手に紅の字を使う大馬鹿者だ。君、何か知らないかい。氏素性の全てを伏せているとはいえ、君なら彼の姿を見たことはあるだろう」

期待には応えられない、と断った。だがこの返答は気に入らなかったようだ。

「知らないって君ね、紅山先生のお世話を任されているんだろう。そんな様子でどうする」と湯呑みを勢いよく置いた。

しかし実際のところ、津崎紅山の屋敷には紅山と自分しか住んでいないのである。

その時、タンッと音を立てて襖が開いた。紅山先生であった。

「君、そろそろ帰りなさい。……今夜は荒れるから」

「千代、大事ないか」
「先生」
夕刻。屋敷から白髪混じりの髪を結わえた着物姿の男性が現れる。この初老の男性が津崎紅山その人であった。
「先程の若者は少々無礼だったな。お前を女中か何かと勘違いしていた。あの様子では、お前の名前もろくに覚えてはおらんだろう」
「そうですかねぇ」
むっ、と先生が眉を顰めた。
今しがた肩を落として去った若者は東京からはるばる新発田までやってきたらしい。彼が出て行った道を先生は冷ややかに見やった。
先生は弟子入りを断っても二杯くらいはお茶を出して帰すのがいつもの流れだ。その際私も話かけられたりもするのだが、今回はその内容が嫌われたらしい。結果は先の通りだ。
「先生の元で雇い入れてもらっているんです。女中と同じでしょう」
「お前は女中などではない」
額に手を触れて先生はため息を漏らした。
「これでは清吾に顔向けできんな」
清吾は私の三つ離れた弟だ。嫌っていた父が陶芸に入れ込んでいた為に、陶芸自体を厭うようになってしまった。
実家――五十嵐家は、元は商家だった。弟の清吾は五十嵐家の長男として家を継ぐよう育てられたが、頑固な父を嫌った清吾は高校卒業を機に家を飛び出した。それきり、病死した父の葬儀に顔を出した以外は帰ってくることは無く、五十嵐家もその頃にはとっくに傾いていて商売も畳んでいた。母は私が中学校に上がる頃には亡くなっている。
紅山先生は父の親友だった。私たち姉弟も幼い頃に陶芸をさせてもらったことがあるし、父の死で身寄りのなくなった際も、私を雇い入れる形で家に置いてくださった。私の仕事は先生の住む屋敷兼工房で掃除洗濯炊事など先生の身の回りのお世話をすることだ。
清吾も、一応は先生と連絡を取っているらしい。と言っても「大事ありません」というような短い手紙ばかりだ。酒屋で働いているらしいと知った時には想像ができず驚いたが、働き口があって安心した。
寂しくはあるが、元気でいるならそれで良かった。先生が雇ってくれたおかげで僅かばかりだが清吾に仕送りができている。それが飢えを凌ぐ助けになれば良い。
「……隠れて陶芸をやっている時点で、顔向けなどできませんよ」
そんな言葉が喉から溢れた。
そうだ。清吾は嫌ってしまったが、私は土を練ることを生業とした。
「冷えてきたな」
そうして羽織を翻して屋敷に戻る。
「来なさい、〝紅千〟。今日の分の講評をしよう」
「――はい、先生。今日もご指導のほどよろしくお願いいたします」

第一章　弟の帰郷

鷹が山から稲刈りの済んだ田んぼへと滑空する。一瞬地面に降り立ったかと思えば、その足に鼠をつかんで飛び立った。

「これ、余所見をするな」と窯の中から先生の声がした。

「わっとと、すみません」

蹴っぽりそうになった素焼きの花器の横を通る。抱えた茶器類を持ち直し、既に窯開きを済ませた窯の前に並べていく。

この日は紅山先生と共に、屋敷の裏山にある窯場で窯詰めの作業をしていた。

普通、陶芸の窯場に女性が近づくことは許されない。そもそも陶芸をやることすらいい顔をされない。そんなことをしている暇があったら、家族の食事を作り、田畑を耕し、子供の世話をしなければならぬと言われるのだ。

先生が陶器を焼く際に使っている窯は登り窯と言って、斜面に対して横に置いたかまぼこを階段状に四段並べたような形をしている。一番低いかまぼこの横腹には火袋という丸い部屋があり、そこからかまぼこの階段を登るように一ノ間、二ノ間、三ノ間と焼成室が連なって捨て間と続く。全体を覆うように屋根が張られ、窯の頂上である捨て間の先には煙突が立っている。

この火袋を加えた四部屋の焼成室に作品を詰めていくのだが、なにぶん二人しかいないので全て詰め終わるのに二日ほどかかる。毎度大変な作業だった。

襷掛けした着物を整え一息つく。窯場を見回せば、先生が中で作業している火袋の前に、膝丈を超える壺がいくつかと花入をはじめとした茶器がたくさん並んでいた。私の作った物もいくつかあるが、やはり先生の技量には遠く及ばない。

「あとは道具土と糊を用意して……。先生、棚の方はどうですか」

「もう少しかかる。先に土を付けておいてくれ」

「わかりました」

先生の工房に戻り、土入れから塊を切り出す。濡れた布巾をかけ直して窯場に戻り、火袋に入れる予定の作品を小さなものから順に土をつけていく。

道具土は焼成した際に陶器が床面とくっついて剥がれなくなってしまうのを防ぐ為に付ける。逆三角錐の形にした粘土を陶器の底に水糊でくっつけ、簡易的な脚を作る。こうする事で窯の中での火の通り道も複雑になり、いい焼き味が生まれる。

もにもにと親指大の土を握りながら道具土を付けていると、屋敷の玄関口を叩く音が聞こえた。

「ごめんください！　西ヶ輪の蕎麦屋のものです！」

先生に断り、急いで屋敷の裏口に飛び込んだ。手を洗い、着物を叩いて土を払いながら「ただ今向かいます」と声を上げる。

息を整え表玄関を開けると、歳七つほどの男の子がこちらを見上げていた。西ヶ輪にある大森蕎麦屋の四男だ。

「いらっしゃい。どうされました？」

男の子はたどたどしい声で「お客さまのご案内です」と答えた。

「東京から来た伏見という方々が、今晩紅山先生のお宅へ来るそ

うです」
「伏見さんですね。いつごろになるかは聞いていますか？」
「ええと、十八時（暮六ツ）！　です」
今日来る予定だった先生の客だろう。この子が言うには、どうやらまず新発田城址の営前練兵場周りを眺めてくるらしい。着くのは日が落ちた後になるようだ。
新発田城址には明治政府によって設けられた兵舎があり、そこに先の日清・日露戦争を戦った歩兵十六連隊が置かれている。正門から伸びる西ヶ輪通りは彼らのおかげでよく賑わった。営前練兵場では日々兵隊さんの演習が行われているし、西公園では喇叭（ラッパ）手の練習風景が見られた筈だ。
今は十四時（昼八ツ）を過ぎたところだろう。正午過ぎには買い物に行くつもりだったが、窯詰め作業が思っていたより時間がかかったようだった。これは後の作業を先生にお任せしなければならないだろう。
「それと……」
うん？　と身をかがめると影がかかった。草履を履き、着物の中に立ち襟のシャツを着た書生の出立ち。手袋をはめた手で帽子を取って、その懐かしい人は居た。
「……お久しぶりです、姉さん。ただいま帰りました」

○

「えっ⁉　清吾くんて五十嵐さんちの⁉」
「ご無沙汰しております。父の晩年には大変お世話になったようで。本来私が喪主を務めなければならないところを助けていただき、ありがとうございました」
新発田の市場で清吾がおじさんおばさん方に頭を下げた。家を飛び出したきりほとんど帰ってこなかった清吾に町の人たちはいい顔をしなかったが、方々で声をかけられる度にきちんと応対していった。
「そ、そうよ～！　お姉ちゃんに全部任せっきりにして！　紅山先生にもちゃんとお礼したの？」
「はい、帰って一番に」
「……清吾の奴変わったなぁ。東京で随分揉まれたのかね」
どんどん人に囲まれていく清吾を横目に、魚屋のおじさんがこっそり話しかけてきた。「昔は絵に描いたようなぶっきらぼうだっただろう」
無言で頷く。弟が故郷に帰ってきたのだけでも驚きだが、得意としていなかった町の人とのやりとりも難無くこなしている事にも驚いた。中学校を卒業する頃はもっとツンケンしていたのだが。今の人当たりのいい様子ではかえって戸惑ってしまう。
清吾の突然の帰省には先生も驚いていたが、どうやら帰省を知らせる手紙より早く着いてしまったらしい。遅れて来た郵便配達員が「あっ……」と気まずそうに背中を小さくして帰っていったのが先程の光景だ。
「でもなんで急に帰ってきたの？　東京での仕事は大丈夫なの？」
「実は……この度自分の店を持つことになりまして」

「店⁉　え、どこで？」
「東京の方で。とは言え場所を探しはしたものの、まだ前金を用意できていなくて。それまでの資金繰りの為に一度こちらへ。東京は部屋を借りるのにも多くかかりますから」
そうなのだ。弟が店を持つと聞いた時、私は喜びが込み上げて言葉にならなかった。あんなに小さかった弟が立派に独り立ちしている、その成長ぶりが嬉しかった。
それまで蚊帳の外だった蕎麦屋の子が清吾を見上げる。
「清吾さんは、紅山先生の跡を継ぐんですか？」
おっと、という空気が流れた。清吾の陶芸嫌いは町の人も知るところで、清吾がどう返すのかを伺っている。
清吾は少し屈んだ。
「俺は跡を継がないよ。陶芸は……少し苦手なんだ」
「じゃあ千代さんが継ぐんですか？」
笑いが起きた。その中で清吾も苦笑して男の子に先を促す。
「姉さん？　どうして？」
「だって」男の子は少し恥ずかしそうにしながら私を見上げ、清吾を見た。――嫌な予感がする。
「さっき千代さん、紅山先生と一緒に窯にいるのが見えたから……」
「えっ？」
ざっと視線が集中した。清吾からもかすかな疑いの目が向けられる。
「……姉さん？」
「まさか！　継ぐだなんて、そんなことあるわけないじゃないですか。きっと今日のお客様にお出しする料理を相談していたのを見間違えたんですね」
パッと明るい顔を作ってあははと笑えばみんなが続く。
この子には悪いが誤魔化す為に利用させてもらうことにした。胸がチクリと痛んだが、気づかないフリをした。
和菓子屋で蕎麦屋の子にどら焼きを買ってあげた。お客さんに出すお菓子を買うついでだ。密かなお詫びも兼ねて兄弟分の土産も持たせてやると、ほくほくと嬉しそうに帰っていった。
町の人を笑顔で見送りながらも、清吾が私に複雑な視線を向けていることには気付いていた。

○

陶芸家・津崎紅山――本名幸山――の自宅は「椿屋敷」と呼ばれている。その名の通り椿の木が屋敷を抱くように植えられているからだ。金谷の奥に収まるように屋敷は建つ。裏に繋がる工房から見える坪庭にも殊更紅い花を付ける品種が一本植えられている。
「やめておけ」と人は言う。椿を庭に植えればその家には凶事が降りかかる、という言い伝えがあるからだ。だが先生はそれさえ楽しんでいる節がある。案外遊びを好む人だった。
先生は庭だけでは飽き足らず、名前にまで椿を植えてしまうくらいには椿を愛している。それ故に庭仕事は全て紅山の領分だった。

とはいえ冬場に花をつける椿だけでは閑散としてしまう。その為庭木は萩や欅など種類に富んでいた。

その晩は居間の窓から静かに咲く萩が見えた。

台所からは居間で先生と卓を挟んで二人の男性が見える。細身の男性が先生に頭を下げた。

「半年ぶりでしょうか。先生もお元気そうで何よりです」

「遠いところをようこそ。大変だったでしょう」

「いえいえ。展覧会の度にたくさんの作品を京都まで運び込んでくださっていますから、こういう時くらいは私どもの方から伺いませんと」

居間からは先生たちの会話が聞こえてくる。台所では清吾と共に食事の支度をしていたが、何を話せばいいのか分からなかった。

清吾は金属に触れないよう手袋を嵌めていた。彼は濡れた肌に金属が触れると赤くかぶれてしまうからだ。幼い彼が赤いかぶれに苦しむ様は痛々しかった。

ちらちらと広くなった背中を盗み見る。筋肉はついたようだが、頬は少し痩けたように見えた。

元気にやっていたのだろうか。ちゃんと食べられていたのだろうか。東京で辛いことはなかったのだろうか。昔から心に聡い子だったから、人に疲れてはいないだろうか。

そんなことを悶々と考えていたら、「あの」と本人に声をかけられ大袈裟に驚いてしまった。

「あちらの方々はどちら様ですか」

「あぁ、先生の個展を企画してくださった方よ」

「個展、ですか」

「来年の三月にね。京都で紅山展が開かれるの」

細身の男性は伏見さんといって、京都で精力的に活動している美術商だ。展覧会もよく企画しているそうで、陶芸に限らず幅広い分野の美術品を取り扱っている。先生の作品も何度か大きな展覧会として企画してくれていて、その度に決して安くはない紅山作品を全て売却してしまうのだから商才があるのだろう。

その隣でかっちりとした正座で寡黙に控えている男性は松原さんだ。伏見さんの付き人という扱いだが、上背があり分厚い身体をしているので実質用心棒みたいなものだ。

「紅千もそこに出るんですか？」

「えっ？」

心臓が跳ねた。清吾は表にこそ出さないが陶芸を毛嫌いしている。それがなぜ紅千を知っているのか。

疑問を感じ取ったのか、清吾がため息をつく。

「こちらに戻る際に、俺の地元が新発田だと知った知人から聞かされたんです。紅千がどんな奴なのか見てこい、と。すみません、少し気になって」

「あぁ……そういうこと」

内心ほっとした。どんな奴も何も、今隣に居る姉がその紅千だとは言えない。隠れて細く息を吐いた。

「詳しいことは分からないけれど、まず出ないでしょうね。普段から大きな展覧会は避けているし、紅山先生も特段『出品しろ』とは言われないから」

「……？」
料理もできてきた。そろそろ一緒に出すお酒を選ばないとならないだろう。
先生はいろんな人からお中元だったりお歳暮が届くので、いいお酒をたくさん持っていた。私はなんでも美味しいと感じてしまうので、ここは一つ、東京の酒屋で働いていたという清吾に任せてみようか。
「さ、そろそろお話も一区切りする頃でしょう。料理と一緒に出すお酒を選んでくれる？」
「！　分かりました。任せてください」

○

「お待たせいたしました。お口に合えば良いのですが」
「やぁこれは美味しそうだ」
清吾と共に日本酒とから寿司を出す。から寿司は簡単に言えば主におからで握った寿司だ。麻の実や生姜と混ぜ、砂糖や酢などで炒るので酒好きには喜ばれる。ネタである小鯛や鯵（あじ）は準備に十日ほどかかるため、お客さんに出す時でもなければ面倒なので作らない。
伏見さんは目を細めて喜んだ。いそいそと日本酒をお猪口に受ける。松原さんも大きな手に小さなお猪口を持って酌を受けた
「あぁ良いですね。寿司の甘味酸味とよく合います」
そして清吾を見やり、おやという顔をした。
「紅山先生、もしやこの青年が紅千先生ですか？」
「私ですか？」と清吾が意表をつかれて目を丸くした。
「いや、うちの千代の弟で清吾という。今日、東京からしばらくぶりに帰ったばかりだ」
「五十嵐清吾（いからしせいご）です」
「これは失礼。椿屋敷で紅山先生と千代さん以外見たことがなかったものでしたから、てっきり。清吾くんは陶芸をやるんですか？」
「……いえ」
「弟は東京の酒屋で働いていまして。今日のお酒も弟が選びました」
「おや！　それは素晴らしい。帰郷の理由を伺っても？」
清吾は緊張した様子で答えた。
「実は、自分の店を持つことになりまして。その資金を貯める為に帰ってきました」
おお、と伏見さんは感心した。
「お若いのに素晴らしいですね」
「私も先ほど聞いたのだが驚いた。最後に見たのは高校の終わりだったのに、いつの間にやら独り立ちしていて」
先生と伏見さんの話を聴きながら真面目な顔を作っているが、隠しきれない喜色が浮かぶ清吾の横顔に幼さを見るのは私が姉だからだろうか。先生は高校卒業の頃の清吾を懐かしんだようだが、私の中ではまだまだ幼い姿が強い。丸い頬を赤くしながら私について回っていたのが今でも鮮明に思い出された。

「時に先生。来年三月の紅山展ですが、紅千先生は作品を出品されないんですか？　私といたしましては是非、師弟作品を揃えたいと考えているのですが」

伏見さんの提案にぎゅっと口を引き締めた。そうでもしないと「出品しないのか」と言ってもらえただけで「ワァアッ」と飛び上がりそうだった。

「姉さん？」と清吾が小声で言うので、くっと堪えて居住まいを正した。

ふむ、と先生は黙考した。

「千代。紅千に言って、蔵から明日焼く予定の鶴首を持ってきなさい。まだ窯には詰めていなかった筈だ」

「ッ、わかりました」

居間を飛び出し、手頃に空いている客間に入り込んで呼吸を整える。

紅山展に紅千（わたし）の作品が並ぶ？　そんな期待が抑えつけても溢れそうになる。

いやいや、とかぶりを振った。まだ先生に大きな展覧会に出しても良いと言わせる物を作れた事はない。生活の合間を縫って作った物は先生に講評していただき、時には実際にお手本を見せてもらえるが、それでも良しと言わせたものは無かった。まだ決まった訳ではない。平常心。平常心を心掛けるんだ。伏見さんの前でぶった斬られる可能性だってあるんだから。

人前で酷評される想像で頭を冷やし、ようやく部屋を出て屋敷の裏に出る。

蔵は屋敷から少し離れた場所にある。工房で作ったものをまずここで乾燥させ、素焼きし、溜まった頃に一気に登り窯で焼成する。その為の薪も窯のすぐそばに積まれている。

蔵に入れば素焼きの茶器や花器がわらわらと乱立している。これでも半分ほどだ。残りの半分は今日の午後に先生が一人で窯詰めした。

目当ての鶴首をそっと持ち上げる。底には紅千（わたし）が作った証である陶印が捺されている。

この鶴首は最近の作品の中でも一番伸び伸びと作ることができた。これを使う人には花だけじゃなく、自分の好きなものを挿して欲しいと思ってほんの少し口を広げた。草木でも良いし、流木を挿したって良い。植物じゃなくても良いと思って作ったものだ。

鶴首を赤子のように大事に抱えて居間に戻ると、伏見さんと松原さんが目を輝かせた。「これは確かに、先生の作風を受け継がれていますね」

先生に渡して部屋の隅に戻る。真正面で評価を聞いては冷静でいられないだろうし、この場では「お手伝いの千代」である私が先生の真正面に断頭を待つかの如く座っているのもおかしいからだ。隣で清吾が居心地悪そうにしていた。先生たちに聞こえないように声を掛ける。

「ごめんね。辛かったら部屋に戻ってもいいんだよ？」

「いえ……」

清吾は少し俯いた。「俺の、個人的な好悪の問題ですから」

それきり黙ってしまった。

「良いだろう」
ぱっと顔を上げた。先生は鶴首を置くとこちらをまっすぐ見つめた。
「随分と上達した。厚み、形、理念もいい。そろそろ大きい展覧会に出すのも良いかもしれん」
「おお！」と伏見さんたちが沸き立つ
「ただし、それはこのまま伸びればの話だ。今はまだ私の個展に出せる物ではない。そうだな……再来月に、新潟で瑞雪展があるだろう。そこに私と共に作品を寄せなさい」
瑞雪展は新潟で活動する陶芸家・瑞雪と、その門下のうち特に良い作品を展示する展覧会だ。毎年行われるこの展覧会には先生も瑞雪先生の為に作品を寄贈する。私も先生のお手伝いとして毎度手伝いに行っていた。
紅山先生と瑞雪先生は作陶仲間であり、若い頃は競争相手でもあった関係だ。
瑞雪先生は紅山先生とは打って変わり、多くの弟子を抱えている。瑞雪展はその弟子たちの育成とパトロン探しを兼ねていた。
「私からは以上。伏見くんからは何かあるか」
「では、こちらの要望もお伝えしておきましょう」
伏見さんは私に向かって真剣な様子でピンと人差し指を立てた。
「私からは一点。『在廊すること』。これに尽きます」
在廊。作家が展覧会に来たお客様に自ら作品の説明をすることだ。紅山先生がやっているのを何度も見たことがある。……それを私が？
ずん、と胃の腑が沈んだ。
「弟子を取らないとしてきた紅山先生が、その作風を継がせても良いと考えたほどの存在。それが紅千という陶芸家です。千代さんにはその注目度がしっくりこないかもしれませんが、今後紅千作品は人々に求められるでしょう。……既に居るんですよねぇ。自らが紅千であり、津崎紅山の後継者であると仄めかす輩が」
松原さんが手帳をみんなに見せた。知らない人の似顔絵が描いてある。清吾も首を振った。
「先生はご存じです？　東京で声をかけられたのですが」
「いや、面識は無いな」
伏見さんが先生に礼を言う。「松原、後で注意喚起を回しておけ」
「とまぁ、こういった輩が居ましてね。小物ではあるんですが、小物も放っておくと増長しますから。ここらで一つ、紅山先生のお墨付きの『紅千』をお客様方に見せたいのです。それが新潟と京都の二か所でお披露目されるならば言うこと無し」
先生を見るが止める気配は無い。伏見さんは私に頭を下げた。
「たった一日でも、一時間でも構いません。一つよろしくお願いします。……と、紅千先生にお伝えください」

○

翌朝、先生は私の顔を見るなりギョッとした。
「……酷い顔だな」
「眠れなくて」

今日は窯詰作業を再開する。二ノ間と三ノ間に作品を入れていよいよ焼成を始めるのだ。しっかりしなくてはと何度も冷水で顔を洗ったのだが、滲み出る疲れは洗い流せなかった。

昨晩は酒を飲んでいないはずだが、寝不足によって少し足元がおぼつかない。襷掛けをし、腰巻き型の前掛けを着けて気合を入れても変わらなかった。

伏見さんはぐっすり寝ている。あの人は酒を飲めはすれども翌日は昼まで眠るのが常なので、私が窯の近くをうろついていても問題は無い。松原さんは基本的に伏見さんのそばを離れる事はない。

清吾がこれから椿屋敷に住むというので、自室に置いていた作陶道具や参考にしていた先生の作品、研究の記録を昨晩慌てて片し戻し隠しておいた。これで突然部屋を訪ねられても私が陶芸をやっている事はすぐにはバレないだろう。

清吾も今日は新発田の町にある酒造を訪ねている。昼までは帰ってこない。

蔵から出されて地面に並んでいる器たちを眺める。昨晩先生に褒められた鶴首を見つけた。

「ふふ」

自然と笑みが溢れる。褒められた内容を何度も反芻してにこにこしてしまう。

だがすぐに暗雲が立ち込めた。

「時間が足りない」

瑞雪展まで二ヶ月も無い。私としてはすぐにでも作りたいのだが、清吾と一つ屋根の下で彼の目を掻い潜りながら作陶する必要がある。それは困難であるように思えた。これに加えて通常の家事もあるのだから、すぐに破綻してしまうだろう。

たった一人の弟から傷付いた顔で睨まれてしまったらと思うと、想像するだけで頭から泥になって崩れてしまいそうだった。

それに問題は他にもあった。

「在廊の問題をなんとかしないと……」

展覧会では一日目に招待客や一般客と作家自身がやり取りすることがしばしば行われる。作品よりも作家の人柄や雰囲気でもって購入を考える人もいるからなかなか馬鹿にできない大事な仕事だ。

問題は在廊をすると女が陶芸をしているのがバレてしまう事だ。

もしそうなれば非難は免れないだろうし、私を弟子と認めた先生にも被害が及ぶだろう。身寄りの無い自分を拾ってくれた上に陶芸の道にまで進ませてくれた先生へ恩を仇で返す事だけは避けたかった。

「どーしよ……」

天を仰ぐ。八方塞がりとはこの事だった。

「千代」

先生に呼ばれると屋敷の裏口横を指された。雑草の絡んだ長椅子がある。

「そんな調子では怪我をする。休んでいなさい」

「でも」

「でもじゃない。その様子では自分で焼成室に閉じ込められそうで危なっかしい」

唸る炎に一瞬にして包まれる情景が浮かんで身震いした。確か

に、今の自分では焼成室を閉じる際に内側から煉瓦を積み上げてしまいそうだ。大人しく休ませてもらうことにした。だが鶴首だけは自分で窯詰めさせてもらえた。

自分の仕事が尊敬する人に認められることは、裏山を走り回りたくなるほど嬉しいことだ。

長椅子から先生の作業を眺めながらそう思う。そして気づけばうつらうつらと船を漕いでいた。

○

初めて陶芸に触れたのは七歳の時だ。七五三のお祝いにかこつけて父が陶土に触らせてくれた。その頃はまだ母も生きていて、弟は四歳だった。窯を貸してくれたのが当時の紅山先生だ。

はじめて作ったのはなんだったか。確か、弟に何か作ってあげたくて、でも出来は散々。それでも、幼い弟が無邪気に喜んでくれたことが嬉しかった。それだけは覚えている。

身体が沈む感覚に目を開けると、先生が隣に座って一息ついたところだった。もう九月も半ばになるが汗を拭っている。

窯は閉じられ、火が入ったらしい。焼成が始まったのだ。

「すみません」

「いい。それより眠れたか」

「懐かしい夢を見ました」

私が初めて作った器の話をした。先生の眦(まなじり)が緩む。

「あれか。確かにあれは、湯呑みの体を成していなかったな」

「あれって湯呑みだったんですか」

「うん？　まあ湯呑みにもお椀にも杯(はい)にも見えなかったが……どちらかといえば広がって盃のようになっていたか」

先生は右手の親指と人差し指の間を噛むようにして笑った。

「ただでさえ厚みがバラバラだったのに、殊更薄くなっている所に陶印を彫ろうとするから危なかったな。あぁ安心しなさい。あれならちゃんとお前の、」

「わあああ！」

我慢できずにカァッと羞恥に火照る。微笑ましい思い出として振り返るのはいいが、自分の作陶を今昔として先生に指摘されると「あれが初めてでしたし⁉」と要らぬ弁明をしてしまう。

当時はもちろん自分の陶印なんて持っていなかった。そのため、自分が作った器に自分の印を入れるなんて、まるで凄い職人になったみたいだと興奮しながら姉弟で一緒に考えたのだ。覚えていないだろうが、椿の花にしようと言い出したのは清吾だった。

ただ、花びらをまるっまるっと彫ってしまったので椿と言いながら梅の花のようになってしまったのはご愛嬌。それもガタガタなのでもう何がなんだかわからない。

今も言及されると小っ恥ずかしくなるのは、あれが自分の内面を純粋に映し取った物だからだろう。心の柔らかく未熟な部分が人の視線に晒されるのは、たとえ過去のものであろうと恥ずかしい。

「なに、お前の父親ほど酷くはなかった。あれは人に広めるのは上手くても自分で作るのは向いていなかったからな。まぁ、私はあの独創性はいいと思っていたが」

一人で黙々と作り続けられるが故に孤立していた先生と世間をつなげたのが父らしい。陶芸に入れ込んでいた父のことだから想像に難くなかった。

「ん」

なんとなしに前掛けを撫でて、いつも前掛けに入れている陶印が無いことに気が付いた。が、すぐに昨晩押し入れに隠したのだと思い至った。

今も使っている陶印は当時考えたものを意匠化したものだ。緩んだ蕾の中心に「千代」の字を「千」を主にして重ね合わせた形になっている。

当時は器に直接彫り込んだが、今ははちゃんとハンコのように使える形にしている。

窯を眺めて先生は言った。

「清吾のことも、在廊のことも、今は置いておきなさい。お前は作陶に集中するように。あぁ、後で蔵をお前用の工房にしよう。二階に色々大事なものも置いてあるから、少し整理しないとな」

そう言って先生は薪を足しに窯へ戻った。

「集中しろというのはその通りなのだけど……」

見上げた空は薄曇り。ここは大体そんな天気だ。

「いや。やらせてくれるって言われたんだもの」

伏見さんとの話を思い出す。作家としてこれを逃す手は無いだろう。……在廊の問題は後回しだ。まずは作らないことには展示も何も無い。

両頬を叩く。まずは目の前の作品だ。

先生を追いかけ、私も作業を始めた。

○

「へぇ！　そんなことになってたの」

「そうなの。……あら、派手かと思ったけど、この帯素敵ね」

「良いでしょ。やっぱり千代ちゃんはなんでも似合うね」

清吾が帰郷してから約三週間後の午後。私は先生の作品を納品する為に仁藤（にとう）呉服店を訪ねていた。今はその一室で「仁藤の坊ちゃん」にして私たち姉弟の幼馴染である和満くんに着せ替え人形にされている。和満くんは清吾と同い年で、私からすればもう一人の弟のようなものだ。

手帳に走り書きを残した和満くんに「次はこれ着て」と新しい着物を渡される。幼い頃からの事なのでもう慣れたものだ。

仁藤呉服店は軍の練兵場に直結する西ヶ商店街にある大きな店だ。和満くんのお父さんにあたる旦那さんが亡くなっても、女将さんの敏腕経営と徴兵され退役していく兵隊さんたちのおかげでここ近年更に隆盛を見せている。今も広間では和満くんのお母様や従業員の方々が座売りでお客さんに着物を広げているだろう。

「清吾の目を掻い潜りつつ、日々の家事をこなしつつ、紅山先生に認められる物を作る……。いやはや大変ですな、〝紅千〟先生」

「やめてよ。先生なんて呼ばれるほどのものじゃないんだから」

「ご冗談を。僕が東京にいた頃だって既に君は一人の陶芸家として知られていたんだから」

「それは元許嫁へのお世辞？」
「まさか！　純然たる事実だとも」
五十嵐家がまだ商家だった頃、私と和満くんは許嫁だった。そのことを理解する頃には家業も傾き父も亡くなった為、私の方から許嫁の解消を願い出た。「気にしなくていい」と和満くんは言ってくれるが、私も気付けば二十も半ばを過ぎた。この歳なのだから外聞も悪いだろうと断った。その後友人付き合いを続けてくれて、騎には秘密の共有までしてくれる和満くんには精神的に何度も助けられている。
「作陶の時間が無くなっちゃってるなら、いっそ清吾を引き込めれば良いんじゃない？」
「あの子の陶芸嫌いは知っているでしょう？　そんな事させられないわよ」
「そうでもないと思うけどなぁ」
和満くんは私が紅千である事を先生以外で知る唯一の人だ。去年まで東京の大学に通っていた彼は、家業を継ぐ為の数々の修行の傍ら、私の作品を誰それが褒めていた等を手紙で教えてくれていた。
和満くんに私が紅千であると知られたのは彼が帰省した時だ。非難されるかと思ったが、彼は応援すると言って今日まで秘密を守ってくれている。
いつもより少し静かな声で和満くんは言った。
「千代ちゃんはさ、なんで清吾が飛び出していったと思う？」
「……あの子は気付きすぎる子だったから、誰も清吾のことを知らない所に行きたかったとか？　お父さんのやり方が気に入らなかったからっていうのもあると思うけど」
清吾が新発田を飛び出す直前を思い出して苦笑する。彼は人の心の機微に聡かった。その為に年齢以上に疲れ果てた様子を見せることもあった。だが気を回すとそれも負担になってしまうらしい。そうして気遣いを受け取れない自分を責めてしまう優しすぎる子でもあった。
最後には「俺の為にって顔してやんなよ！　頼んでないよ！」と涙ながらに叫ばれて清吾は東京に行った。
だから大人びて安定したように見える今の清吾を前にしても、何か無理をしていないかと気を回して、これも彼の負担になっていないだろうかと二重三重に考えてしまうのだった。
「清吾はさ、千代ちゃんに迷惑をかけたくなかったんだよ」
「迷惑？　なんの？」
「全部だよ。千代ちゃんの言う通り清吾は人の心に聡い。誰かが傷付いていれば分かるし、誰かが人を想って行動したことも分かる。それが言葉に出されていないものでもね」
鏡に和満くんの切長の目が伏せられたのが映る。
「でもね。多くの悪意、多くの善意を感じ取れるからこそ、その対応に疲れてしまったんだよ。アイツは感知能力だけ高くて、それを受け止める精神はまだ子供だったんだから」
「そんなの、大人でも難しいでしょうに」
「僕もそう思う。なのにアイツはそれを理解しようとしない大馬鹿だ」
清吾は人の心に聡い子だった。それ故に理不尽な悪意に戸惑い、

散りばめられた善意に応えられなくて落ち込んでいたのだと和満は教えてくれた。

「なら尚更あの子に無理はさせられないわ。唯一残った肉親が自分の嫌いなことをやっていると知れれば、あの子きっと傷付くもの」

暗くなるからと和満くんに送られて帰宅すると清吾が玄関口に立っていた。

「清吾？　冷えてきたから中に入りなさいな」

清吾は何も言わない。それどころか、俯いた前髪の隙間から冷たい視線が私に向けられた。

「清吾……？」

「おい、どうした」

たじろいだ私と清吾の間に和満くんが入る。

「姉さん。話があります。和満、お前も入れ」

清吾は踵を返して玄関に入り、顎で和満くんを招き入れた。

「待てよ。先に要件を話せ」

和満くんの言葉に清吾が足を止める。清吾は物静かな子ではあったが、今はいつになく空虚な様子が見える。清吾はゆっくりと振り返り、暗い玄関口の中から握りこぶしを伸ばした。

「姉さんに、お返しします」

身体の中で嫌な予感が立ち上った。それでもすくむ足を叱咤し、弟にゆっくり歩み寄る。そして渡されたものを見て失敗を悟った。

清吾は泣き出すように、威嚇するようにくしゃっと皺を寄せた。

「……俺に隠れてやっていたんですね」

手のひらにころんと転がったのは、探していた陶印だった。

続きは電子版へ

⇩

▼▼チーム山米茶文庫

阿賀北ノベルジャム参加感想

茶山日縁

「阿賀北ノベルジャム、どうだった？」と聞かれれば、「楽しかった！（しんどかったけど！）」という感想が出てきます。

著者参加して、まず自分の経験の無さを実感しました。プロットを作る際も「これにする！」と決め打ちできず、参加者中で常に最後尾を走っている気分でしたが、チームの皆さんが伴走してくれていたので心細さは感じませんでした。

制作期間中はがむしゃらに作業しました。映画『マッドマックス～怒りのデスロード～』の荒野爆走のような心情です。けれど「わかんないよ～～！（泣）」と頭を抱えることも珍しくはありませんでした。それでも睡眠時間だけは死守しました。

なぜなら過去一月ほど、迫る締切に追い立てられて睡眠時間を犠牲にして見事に見た目も頭の回転もボロボロになったことがあるからです。執筆も日付を超えないようにしたのが今回走り切れた要因の一つだと思います。健康第一。

苦手な販促でもたくさんの力をくれたチームの皆さんには感謝してもしきれません。気力も途切れ、苦手なあまり避けてしまいましたが、寄り添ってくれたおかげで最後の最後に向き合えました。

ありがたくもグランプリを頂き嬉しく思います。

表彰式では不思議と緊張しなかった事を覚えています。

執筆に関しては全力でやりきったし、販促も最後は逃げずに向き合えた。自分の中で良いものができたという実感もあった。もしこの作品が箸にも棒にもかからなかったとしても、地の底まで落ち込むことはないだろうという奇妙な安心感がありました。

ただ「あの要素が欲しかった～」とか、「こんな風景を見て取り入れて欲しかった～」という講評を受けた時は「うおおお！　入れたかったけど入らなかったんじゃい！」という感情が迸りました（笑）まだまだ修行が足りません。取材スキルも育てないと。

ちなみに最終稿を提出したのは〆切である12月18日の23:59でした。本当にギリギリ最後尾。

阿賀北ノベルジャム２０２１感想

ヤマシタナツミ

地域に目を向けてもらうための取り組みとして、まだ何かが足りないと感じていた時に、阿賀北ノベルジャムのことを知りました。

そんなタイミングでしたので、友人から誘いを受け「これが求めていたものかもしれない」と思い参加を決めました。実際に参加し

てみて、その直感は当たっていたと思いました。
開会後の創作期間はチームで編集会議を開き、地域の歴史について深掘りをしたり、登場人物の背景について詰めていったり。地域発ノベルジャムならではの体験をしました。また各自の意見をどこまで拾い上げて形にしていくかも含め、試行錯誤しながら向き合った時間は、学生時代の学園祭企画のような熱い思い出になりました。
かなり熱を込めて取り組んだので、米田さんの作品がＮＧＴ48に選んでもらえた時や、茶山さんの作品がグランプリでチームとして販促ＰＲ賞をいただけた時は、とても嬉しい瞬間として記憶に残りました。評価コメントでは「どんなポイントが評価されたのか」「足りなかったのはどんなところか」を明確にしていただけたので、スッキリした気分で終えることができました。
また、個人的にはチーム発足から授賞式の日までチームアカウントでTwitterやnoteの運用したことも大変良い経験になりました。「阿賀北ノベルジャムを知らない方にどうやって興味を持ってもらうか」を、フォロワーさんとのつながりの中で考え続けたことは、今後の仕事にも活かされそうです。
様々な良い経験ができましたので、まだ阿賀北ノベルジャムを知らない人、とくに若い方や経験の少ない方を中心におすすめしていきたいと思っています。以上、感想です。阿賀北ノベルジャム開催に尽力いただいた皆様、本当にありがとうございました。

地域を舞台にした物語を紡ぐ

佐藤智

「阿賀北ノベルジャム２０２１」に「編集者」として参加しました。日頃私は、ライターと編集者として、地域での教育を取り上げたり、その土地で自分らしく生きている方々へのインタビューを重ねたりしています。そうした活動を通じて、地域を舞台に生きる方々にスポットライトをあてる意義を感じてきました。
阿賀北ノベルジャムは、まさにその意義を体現しているイベントです。フィクションの世界で、阿賀北地域に生きる人々をいかに生々しく描ききるか。その試みに挑むためには、地域やその地域で生きる人々への理解を深めていかなければいけません。
実際に、私たちのチーム（山米茶文庫）の作家のお二人も、それぞれが地域について深く考察なさっていました。おひと方はこの土地で生きた過去の女性を理解しようと、あらゆる視点から時代考証を進めていました。もうおひと方は県外にお住まいだったのですが、弾丸旅行で阿賀北地域を訪れ、土地の空気感に触れていらっしゃいました。
また、イラストやデザインというかたちで息を吹き込んでくださるデザイナーの存在も大きいものだと感じました。文字だけではない、ビジュアルとして登場人物が立ち上がり、より地域での物語を香り高いものとしてくれました。
本業がありながらの参加には苦労しましたが、創作に熱い思いを

持つ皆様とご一緒できたことは大変貴重な機会となりました。
改めて、地域を舞台にした物語を紡ぐことはシビックプライドの醸成につながる、非常に意義深い活動だと感じています。また、オンラインでの取り組みの実施は、地域外の人々を巻き込み、阿賀北地域の魅力を伝える機会にもつながっているはずです。これからも「阿賀北ノベルジャム」が、阿賀北地域、そしてそこに生きる人々の美しさを、広く伝える機会となることを願っています。

あがの
あねさま

米田淳一

2029年の地方実験都市。
SDGs達成期限直前まで
日本が抱え続けた課題に

AI三姉妹が
斬り込む?!

海上自衛隊の戦術航空士の家に生まれ、艦船・飛行機に造詣の深い著者が書く、SF地方コミカル架空戦記ホームドラマ!!

あがのあねさま

米田淳一

1話・2029年睦月（1月）

『『阿賀野（あーさん）』はほんと、いい人なんだけどねえ。見てるとかわいそうになってくる。もっと好きにしたらいいのに」

このセンターにやってきた新発田市役所の職員がため息をつく。真新しいこの自衛隊新発田防衛センター庁舎の入り口には正月らしく、門松が飾られているのがこの執務室からも見える。

「阿賀野（あーさん）、いつもなんでも背負い込んじゃいますからね」

「なんでまた、よそからきたのによくある『新発田の長女』みたいになっちまうのか。しっかり者なのはほんといいんだけどね。うちの息子にもらいたいぐらいだ」

私もため息になった。この暖房のきいたセンターの外はこのところずっと雪が降っている。真新しいこの建物の遮熱加工された窓の外、空は相変わらず重苦しい灰色の雲の合間に青空が混じる複雑な空だ。外ではヘリポートの雪かきを終えたグリーンの作業着の整備員たちが朝の点呼に整列し始めている。皆の吐く息が白く見える。冬の雪国の自衛隊の朝は早いのだ。

2029年の新春の朝を迎えても、まだ雪かきは人手を使わなければならない。21世紀初めの新発田の雪といえば12月から3月、ピークは2月だったのだが、今はすっかり時期がずれている。しかも地球温暖化と言いながら気候の変動で1月でもヘーキで大雪が降る。そこでニーズが増えて便利な雪かきロボットがいくつも開発されているのだが、ロボットはいつもの通り、よくできてはいても、肝心なところで気が利かない。

というわけで、そのために私たちが建造されたのだけども、相変わらず私たち三姉妹の三女・矢矧（やーや）はドジばかり踏んでいる。今日も屋根の雪を落としたら案の定、下にいた電気自動車にその雪の塊が直撃し、フロントガラスにヒビを入れてしまったのだ。それも我々のクルマならまだしも、並びの市のカルチャーセンター来所者さんのクルマなのだ。このセンターは新発田市の中央公園の一角に新設されているので、民間人もよく近くにやってくる。

そこでその物損のフォローに保険屋さんだのに阿賀野（あーさん）が駆け回る。阿賀野（あーさん）、勉強してもっと資格取るって言ってたのに、そのために参考書を見ようとしていたパッド端末が机の上にそのままで、充電が切れかけの表示になっている。矢矧（やーや）に泣きつかれたとはいえ、次女の私は矢矧（やーや）に『いい加減しっかりして！』と言いたくなる。この新発田のセンターに配備されてから2年目の正月を迎えたのに、未だに雪かき一つ満足にできない私達に私は思わずため息が出る。

「おー、阿賀野は朝からまた矢矧の尻拭いか」

「司令！」

私が阿賀野のパッド端末の充電ケーブルをつないでいるときに部

屋に入ってきたのは宮澤司令。私達三姉妹で作る『特殊地域防衛隊』の隊司令である。
「保険屋さんとの交渉って私達の仕事でしたっけ。私達の本来任務って」
「まあ、そう言ってられる状況でもないからなあ」
「え」
「え、じゃないよ。昨日だって俺、また市ヶ谷（防衛省本省）とのリモート会議でギャンギャン吊るされたんだぜ。もう２０２９年、目標年の２０３０年まで時間ないんだ、早く成果を出せ、って」
司令はこの執務室のかたわらのコーヒーメーカーでマグカップにコーヒーをいれた。グリーンのセーターに空将補の略章をつけたその姿はいかにもベテラン自衛隊幹部らしい。
「成果なんか出るかっつーの。いったい女性サイズロボット巡洋艦がどうやってＳＤＧｓを一発逆転で達成するんだよ。それもたった2年で。こんな計画立てたやつ、ほんと、頭湧いてるよ。どこのどいつだ一体。俺が聞きてえよ」
司令の言葉に私はちょっと複雑な気持ちになる。確かに私達は無力だ。少数の正義の味方が『ぱんぱかぱーん』と現れても、この地球に起きている深刻な問題、気候変動も貧困も解決しようがないのはまさしくそうだからだ。
「誰が立てたんでしょうか。いくらなんでも無茶すぎますよね。私が言うのも何だけど」
「まあな。でも国も結局、手詰りになったんだろうなあ。国家財政傾けたくないってやたらなんでも投資を渋ってたけど、そのせいでいつのまにか予算のちゃんとした使いかたもわかんなくなった。コロナのときなんか、あのさなかに30兆円執行できない予算が出た。今回もそれに似たことになって。そこでどっかの悪いやつが予算消化のために変なアイディア吹き込んだんだろう。それで君らの建造にまさかの予算がついちゃった」
「その『変なアイディア』が私達なんですね」
そのとき冷たい声でこの執務室のドアから入ってきたのは、よりによって阿賀野（あーさん）だった。長い髪に切れ長の眼。でもいつも穏やかで、彼女が怒ったところを私はまだ見たことがない。怒っていい！　と思うときでもいつもはぐらかすのだ。この突っ込みもどこかまた冷たいけど冗談まじりの声だ。
「いや、そういう意味でなくて」
司令はちょっとうろたえている。
「じゃあどういう意味なんですか」
私も詰める。私達の司令は時々こういう事があるので大丈夫かと私は危ぶんでしまう。空将補なんだからもっとしっかりしてほしい。思わず私の口もとがる。
「それで1人あたりの建造費に海自の護衛艦4隻分使っておいて、それに雪かきさせてるんですか」
「雪かきは雪国住まいの大事な仕事だぞ」
司令はそういってコーヒーを口にした。
「そりゃそうですけど、税金の使い方としてどうなんでしょうか」
そこにまた部屋のドアがあいた。
「お姉ちゃん！　ごめんなさいー！」

タレ目の目に涙をいっぱいに浮かべて半べそでやってきたのが矢矧（やーや）だ。ほんと甘えん坊なのは三女らしいといえばそうなのだが、私達にそういう性格付けが起きているのがなぜかはじつはわからない。私たちはＡＩなので長女も次女も三女も、さらには女性らしさなんてものがセットされる理由がないのだ。この性格はそういう『先天性』のものではなく、配備後に人間社会で任務についていることでの『後天的』なものだと定期検査で分析されている。人間社会ってものは見た目や先入観で性格や考えまで鋳型にはめてくるところがある。正直、窮屈で仕方がない。それを解決するために私達が建造されたはずだけど、すっかり話が逆になってしまっている。それほどにもＳＤＧｓの課題は困難なのだ、と思ったけど、え、あれ？　これＳＤＧｓの話ってことでいいんだっけ？　と私は少し不安になった。

「あれほど気をつけるのよ、って言ってたのに。まあ、相手側の保険屋さん、悪い感じはしなかったから、普通に保険おりると思うわ。相手さんにもちゃんと謝ってきたから大きな問題にはならないでしょう。司令、では」

阿賀野がそうまとめて水を向ける。

「わかった」

司令が司令の席についた。

「おはようございます。特殊地域防衛移動要塞Ａ－１号・阿賀野以下、Ａ－２号能代、Ａ－３号矢矧、以上３名、今日の執務に着きます」

私たち三姉妹は阿賀野（あーさん）の声にあわせて並んで司令にさっと敬礼した。

「ご苦労」

司令が答礼する。

「今日のローテーションは、阿賀野が本務、能代がバックアップ、矢矧が短期検修に入ります」

「なんだ、矢矧は今日はただの留守番なのに、雪かきして仕事増やしたのか」

「すみません！」

そう冷やかす司令に矢矧（やーや）は半べそで謝っている。その大きなタレ目の小顔はほんと、私が軽くイラッとするほどあざとい可愛さである。べそをかけばいつも許されてしまうからいつまでもそうなのよ！　ほんとうに！　イライライラッ。

「のんちゃん、そうイライラしないの」

阿賀野がたしなめる。

「阿賀野（あーさん）は矢矧（やーや）に甘すぎます！」

「それは自覚してる」

「でも！」

その時、館内放送がなった。

「県警本部から入電中。県警本部から入電中。新発田第一高校で立てこもり事件発生。県知事から当隊に出動要請発出。移動要塞は出動せよ」

「行くわ。のっさん」

阿賀野がそう言いながらコート掛けから揃いのジャケットを取る。

私もジャケットを取りながら答える。
「のっさんはやめて。その呼び名嫌い！」

続きは電子版へ
⇩

▼▼チーム山米茶文庫

阿賀北ノベルジャムに参加して

米田淳一

すごく正直なことを申し上げると、参加者が少ないと始まるまでに聴いていたので、そこそこ賑やかしをして数ヶ月そこそこ楽しんで最後に新潟のおいしいお米をもらえればいいや、ぐらいのだらけた動機での参加でした。しかし参加してみると途中のミーティングのたびに主催さんや審査の先生の本気度に「これは応えたい！」と思ってしまい、ついつい阿賀北への高速バス使ったちょっと無理めの取材旅行をしたり、作品も字数上限すれすれの大作にしてしまったり、さらには本来文芸色の強いコンペのはずなのにアニメっぽいエンタメ作品にしてしまったりと暴走しました。趣旨を理解してないんじゃないかと途中で猛烈な後悔に襲われたり、編集さんがなかなか連絡取れなくてやきもきしたり、デザイナーさんに余計なことに私の描いた絵を見せてメーワクかけちゃったなと思ったり、チームメイトに的外れなアドバイスしたんじゃないかと猛烈な鬱になったりとまさにジェットコースターのような日々となりました。

でも思えばこのコストでこれだけジェットコースター体験が出来れば素晴らしいコスパのイベントだったと思います。それがなぜか運営さんの男子たちにやたらウケたので「これはいけるかも！」と期待してしまい、ますます字数増やしたり挿絵写真つけたり旅行記をつけたりとすっかり本作りを楽しんでしまいました。賑やかしのはずでしたが阿賀北の風景も宿も料理も人との出会いもすっかり堪能しました。そしてその歴史や風土を感じたところを作品に反映しようとしたのですが、私の弱点で、趣旨外れのエンタメで勝負したビハインドにその描写の甘さもあり、手ぶらに近い結果に終わりました。でもチームメイトがグランプリとれたし、チームも成果出せたし、結果として上々だったのではないかなー、と参加賞の新潟のお米食べながら思っています。

運営や他のご参加の皆様、宝物のような日々をありがとうございました。

オン・ユア・マークス

ギア比 4:1

俺には姉貴がいる。

mill scale

加治翔太郎 23 歳。ニート二年目の夏。
収入ゼロ。貯蓄ゼロ。やる気もゼロ。
頼みの綱の新人賞は落選。お先真っ暗。

『オン・ユア・マークス』

著：ギア比４：１（ぎあひよんたいいち）
編：波野發作
デ：伊藤柊果

なかった。

何度見てもなかった。

近所の書店の雑誌売り場の前で、今日発売された文芸雑誌の「町角社小説新人賞一次通過作品」のページを食い入るように見た。沢山並べられた作品名の中に、俺が応募した小説はなかった。

こんなはずじゃない。こんなはずじゃ。この俺がまさか一次選考で落選するなんてあり得ない。

俺はその事実が受け入れられなかった。何かの間違いじゃないか？　郵送トラブルがあって正しく出版社に送られなかったとか？　あるいは応募数が多くて下読みの連中がまともに読んでくれなかったとか？　言い訳じみた考えが俺の頭を駆け巡る。

……帰ろう。これ以上ここに居ても仕方がない。俺は重いため息を吐いて、文芸誌を元の場所に戻しふらふらと出口に向かった。その時、自動ドアの横に置かれている求人情報誌が目に入った。その下には「ご自由にお持ち帰り下さい」と書かれている。俺はちょっと見てみるかと思い、それを一冊手に取ると何も買わずに店の外に出た。

外に出ると水分を多く含んだ真夏の熱気が俺の全身にどろりと纏わりついた。ジィジィというせみの声がやけに騒がしい。俺は求人情報誌を片手に家に向かってとぼとぼ歩き出した。首すじに汗が滲んできた。

家に帰り、居間に入ると台所で母さんが食器を拭いていた。エアコンの冷気が心地良い。今日は確か姉貴も休みだったはずだけど、どこか知らないが出掛けたようでその姿はなかった。

「おかえり」と母さんは振り向かないまま俺に声をかけた。俺は「あぁ」と曖昧に返事をしたが、それ以上の会話にはならなかった。冷蔵庫からペットボトルの麦茶を取り出して、グラスに注いで一気に飲み干した。

ダイニングテーブルの上にはサランラップがかけられた冷やし中華が置いてある。まだ昼食を取っていなかったな、と俺は思い出した。新人賞に落選したショックとうだるような暑さであまり食欲はなかったが、結局それを食べることにした。

冷やし中華を食べ終えて食器を流し台に置くと、俺は居間のソファに寝転がり先ほど書店から持ち帰ってきた求人情報誌を開いてみた。「通勤がラクな仕事」や「仲間と応募できる仕事」などバリエーションに富んだカテゴリーに分かれて、それぞれ雑多な求人情報が二色刷りで掲載されている。俺はぺらぺらとページをめくった。チェーンのコンビニや飲食店のアルバイトからクリーンクルーの仕事まで様々なものが載っていたけれど、正直どれもピンと来なかった。もっと立派で自分に相応しい仕事があるのだと俺は思っていた。

雑誌を床に放り投げて、代わりにズボンのポケットからスマートフォンを取り出した。いつもの習慣でフェイスブックを開いてかつ

ての同級生達の投稿を見る。ある者は地方銀行の営業職に就いており、その仕事の厳しさと忙しさに悲鳴を上げていた。またある者は趣味で知り合った女性と結婚したらしく、どこかの浜辺をバックにツーショット写真を上げている。大学生だった者もみんな社会人になり、それぞれの人生を歩み始めていた。

俺だけ大学の卒業式の日から時間がぴたりと止まっている気がした。その先のスタートラインに立てずにいる。自分だけ置いてけぼりでみんなの背中が遠ざかってゆくような感じがして、慌てて俺は開いていたフェイスブックを閉じてスマートフォンも床に投げ出した。

俺はこれからどうなるんだろう？　天井の模様を見つめながら茫漠とした不安に包まれた。でも、まあいいや。俺もまだ二十三歳だしこれから本気を出せば、きっとあっという間に追いつけるさと思い直し目をつぶった。炎天下を歩いた疲労で頭がぼんやりする。そしてそのまま俺はいつの間にか眠りへと落ちた。

家の前を通る移動販売車の声で俺は目を覚ました。変な寝方をしたからか頭がひどく重い。霞む目をこすって起き上がると窓から差し込む陽の光は橙色に染まりつつある。

俺は頭をわしゃわしゃと掻き回してテーブルの上のスマートフォンを掴んで、画面を見た。時刻は午後四時を回っていた。ということは二時間近く眠っていたことになる。

そろそろ姉貴が帰ってきそうだ。顔を合わせると、また小言を言われるに違いない。俺はのろのろと立ち上がり自分の部屋へと避難することにした。

二階にある自室に入って、窓を開けた。前方には色づき始めた田んぼがずっと広がっていて、作業服姿のおじさんがドラム缶で野焼きを行っていた。その煙のにおいが夕風に乗って、俺のところまで僅かに届く。何だか訳もなく懐かしいような思いがした。

新発田の夕方は嫌いではない。ひぐらしの鳴き声とか、軽トラックが走り去ってゆく音とか、田園風景の向こうで輝いているパチンコ屋のけばけばしいネオンとか。なんか風情がある気がする。

一陣の風がまた部屋に吹き込み、もう片方の窓に下がっているアルミのブラインドがかちゃかちゃ揺れた。。

俺はベッドに寝転がり、スマートフォンを手に取った。ＬＩＮＥが一件入っている。岸和田ゆりさんからだった。

——やっほ。しょーたろー元気？　仕事見つかった？笑

とのメッセージだった。

——いや、見つかってない。色々探してはいるんだけどね笑

と、適当に返した。今日求人情報誌を眺めてみたし、あながち嘘でもない。

スマートフォンを放り投げて十秒で返信が来た。

——うそ。どうせなんもしてないんでしょ。相変わらずクズだね笑

文面だけ見るとなんだか脈ありみたいな感じがするが、岸和田さんはもう結婚していて現在姉貴と同じドラッグストアでアルバイトとして働いている。

ひどいと一言、号泣している顔文字を送ってやった。

——めぐりさん、心配してるだろうなー

と間もなく返ってくる。
——昨日ケンカした。俺は悪くないんだけど
——どうせしょーたろーが悪いんでしょ。何したの？　言ってみ
——姉貴がバカにするから。それでちょっとイラッとした
——それで？
——姉貴の生き方の方がくだらないよって言った。そしたらなんか家出て行った
——１００パーあんたが悪いよ。このクズ
二回も言うなんてちょっとひどい。俺は傷ついた。
——そんな感じだからさ、あいつは別に俺の心配なんてしてないと思うよ
——どうかなー、結局姉って弟のことが大事だし心配しちゃうんだよ
——なにそれ？　笑
岸和田さんには三歳年下の弟がいて、俺も地元の子ども会の時などに何度か顔を合わせたことがある。でも、俺には二人がそんなに特別仲がいいとは思わなかった。
——いや、子どもの頃はさ、お姉ちゃんなんだからって私ばっかり親から叱られたり、色々比べられたりムカつくことも多かったんだけど、大人になって落ち着くとやっぱり弟がいて良かったなーって思うよ
——ふうん
——だからね、弟の身になにかあるとやっぱり心配しちゃう
——岸和田さんだけじゃないの？
——違うと思うよ。だって、めぐりさん職場でいっつもしょーたろーの話してくるもん
——へぇ、姉貴はなんて？
それは俺にとって意外な事実だった。自分のことについて、どんな話をしているのか興味がある。
——翔太郎ってばほんとにだらしないんだよ～とか、今度は小説家になりたいとか言ってんだよバカじゃないの？　とか
——それ心配してる……？
——してると思うよ。本心ではね。しょーたろーにしっかりして欲しいんだと思う。話してそんな感じがする
——ふうん
——だからね、ちゃんと真っ当に生きなよ。じゃこれから遅番のシフトだからまたねー。更生しなさいよしょーたろー
やれやれ、俺は犯罪者かよと思ったけれど、これでもうお終いみたいな感じだったので適当なスタンプを送っておいた。
気が付くと部屋の中はすっかり夕闇に満たされていた。時刻は六時を過ぎたところだ。
「翔太郎、ごはんよー」
母さんが呼ぶ声がした。俺は大きなため息を吐いて立ち上がり、一階へと降りた。

夕飯はクリームシチューと肉じゃがと、酢の物だった。
テーブルには姉貴の分の料理も用意されていたけれど、姿はなかった。大方友だちと遊びにでも行っているんだろう。父さんもま

だ仕事から帰ってきていないようで、その姿はなかった。
椅子に座ろうとした時、俺は部屋の隅に求人情報誌が落ちていることに気付いた。それは俺が日中書店から持ち帰ってきたものによく似ていたが、同じものではなかった。
そしてその上には、ボールペンとメモが置いてある。俺は何気なく見てみると、メモ用紙には新発田駅前にあるビジネスホテルの名前とか、食品工場の名前とか清掃会社の名前とかが箇条書きされていた。その字は少し右上がりで、姉貴の字に違いなかった。なんだ姉貴、転職でもするつもりなのかと俺は思った。
椅子に座って、俺と母さんは夕飯を食べ始める。
「姉貴、転職でもするつもりなのか？」
俺は母さんにそう聞いた。母さんは、味噌汁のお椀を手にぽかんとこちらを見た。
「え？　なんで？」
「いや、そこに求人情報誌あるし。なんか会社メモってるし。姉貴が書いたんだろ？」
俺は、部屋の隅に落ちている求人情報誌とメモに視線を向けながら言った。
「あれあんたの就職先探してんのよ」
「え？」
「お姉ちゃん、あんたに合いそうな仕事探してんのよ。どこかであれ貰ってきてさ」
母さんが味噌汁のお椀をとん、とテーブルに置いた。
「何だよそれ……おれ別にそんなこと頼んでなんか……」
「あんたのこと心配してるんだよ」
心配？　姉貴が俺のことを？　さっきの岸和田さんとのＬＩＮＥが思い起こされる。
――めぐりさん、心配してるだろうなー
――結局姉ってね弟のことが大事だし心配しちゃうんだよ。
「別におれの心配なんかしなくたって……」
俺はぼそっと呟いた。
「お姉ちゃん、ほんとは大学に行きたかったの知ってるでしょ？」
母さんが箸を置いて、真剣な目で俺の顔を見る。
「あぁ……」
俺は頷いた。姉貴も大学に行きたがっていたことは何となくわかっていた。成績も良かったし。けれど、ちょうどその時期に父方のばあちゃんの闘病があって、金銭的な理由で俺と姉貴二人とも同時に大学に行く訳にはいかなくなった。その結果、姉貴が俺に大学進学を「譲る」感じになったのだ。詳しい事情までは知らないのだが。
「だからこそあんたにはしっかりして欲しいんだと思う。別にあんたのこと恨んでなんかいないと思うけどさ。あんたが大学まで行って、就職もしないで毎日だらだらしてたら、あんたに大学を譲った自分がみじめになるじゃない？　だからしっかりしな、翔太郎！　お姉ちゃんのためにも」
母さんは芯の通った声でそう言った。俺は何も言えずうなだれた。
「お姉ちゃんね、薬剤師になりたかったんよ」

母さんがそう続ける。それは俺の知らない話だった。
「そうなのか……」
「あんた、ちっちゃい頃体が弱くてよく風邪引いてたろ？」
「あぁ」
「ある時、あんた薬局で泣いたの覚えてる？　幼稚園くらいのことだったかねぇ」
「いや……」
「その時薬剤師さんがあんたのことあやしてくれたんよ。それをお姉ちゃんが隣で見ててね、憧れたみたい。知らなかったろ？」
なんだよそれ。俺は母さんの話を聞いているのがちょっと辛くなってきた。
「……うん」
そう頷くのが精一杯だった。
「まあでも、お姉ちゃん今の仕事でも満足してるみたいだし、これで良かったのかも知れないけどねえ。結局は自分で選んだ道だしね」
母さんは煮物のにんじんを突きながら、優しくそう言った。俺は何も言えなかった。
母さんの方も、これで話はお終いという風にまた食事に没頭し始めた。
俺は夕飯を急いで食べ終えると「ごちそうさま」と告げ食器を流し台に下げて、そそくさと居間を後にした。部屋を出る時に、ちらっと求人誌と姉貴のメモが視界に入って慌てて目を背けた。

続きは電子版へ
⇩

この距離を噛みたい

刀木 KATANAGI

Je veux mordre cette distance

歯は一本だけでは噛めない

二年生・兎村ゆかりが校庭から生える巨大な「歯」を見るようになったころ、みんなが憧れるお姉様、生徒会長・熊倉美維奈が行方不明になった……。

mill scale

『この距離を噛みたい』

著：刀木
編：波野發作
デ：伊藤柊果

プロローグ　熊倉美維奈（くまくらみいな）

今日も、部屋の姿見には優等生が映っている。しわ一つない制服に、膝丈のスカート、艶めく髪、短い爪、そして優しい微笑み。この部屋を出たら、私はこの人になる。

教室に入るときは、誰よりも先に挨拶をする。目があった人、眠たそうな人、そしていつもの友達。クラスメイトは快く返してくれるし、授業が始まるまでの時間は、私を取り囲んで、昨日の放課後から今に至るまでのエピソードを次から次へと話してくれる。去年から同じクラスのみんなとは良好な関係を保てているから、この挨拶運動もそれなりに成果を上げていると思う。でも、それだけではない。ベル着を守って、授業中は積極的に発言し、とったノートは欠席者の机の中にこっそり入れておく。こんな小さな行動の積み重ねが、左腕に伝統の腕章をつける資格をくれた。だとしても、私はこの腕章に、どれだけ見合っているのだろうか。

一年生はまだ高校生活に慣れていないし、二年生には五月病が流行っている。奇跡的に三年生の悪いニュースは聞かないけれど、いつ進路への悩みが表面化してきてもおかしくない。私もその点については不安だけど、まずは来月に控えた体育祭を成功させることを考えなければならない。

「熊倉？　何悩んでんの？」

隣の席で問題集を解いていた凌空（りく）が、いつの間にかこちらを向いていた。問題を解き終わった人から休み時間なのだが、先生は今回も凌空の足止めに失敗したらしい。チャイムが鳴るまではまだ十分近くある。

「悩んでないよ。それより、もう解き終わったんだ。さすが副会長」

凌空はあきれ顔でペン回しを始めた。

「体育祭の件だろ。さらに二年生の五月病をどう克服するのかも同時進行で考えてオーバーヒート寸前ってとこか？」

あっさりと見透かされてしまった。私は残りの問題と相談して、結局問題集を閉じた。凌空は私が問題を解き終えていないことに気付いていたが、私の判断を尊重してくれたらしく、何も見なかったふりをしてペンを回し続けている。

「どうして会長にならなかったの？　凌空の方が私なんかよりずっと向いてるのに」

「ペン回しの達人になりたかったんだよ。それに、俺に人なんて寄ってこないし、寄ってきて欲しくもない。そんなのどうでもいいだろ。体育祭については放課後に生徒会で話し合うけど、五月病は思ったより深刻だよな。二年生以外にも患者が増えてるらしい」

そんな情報は初めて知った。二年生だけだと思っていた。どこから情報を仕入れてくるのかは分からないが、ペン回しをして気だる

げに見せていながら、彼は誰よりもこの学校を案じているようだ。それに比べて、私は……。何も言葉が浮かばない。

「まあ、無理矢理学校に引っ張り出せばいいってもんでもないしな。やっぱり俺たちは体育祭に集中しよう」

「うん」

弱気になんなって、と凌空は笑って、チャイムと同時に教室から出ていった。その代わりに、クラスメイトが昼食を持って私の周りに集まってくる。

そうだね、そうだね。話を合わせて、常に模範解答を探る。でも、正論を言い過ぎないように注意する。化粧が濃い子に校則違反だと言っても、直すわけがない。みんな、わかっていて反抗しているんだから。化粧を薄くする方法を一緒に考えてあげるぐらいじゃないと、良い関係なんて作れない。友達と話しているのは、私なのか、それとも生徒会長なのか、そんなことも、自分ではわからない。

外の空気を吸いたくなったので、みんなにはトイレに行くと伝えて席を外す。渡り廊下を歩く時も背筋を伸ばす。気を付けないと、落ち武者のようになってしまう。

「おう、熊倉か。調子はどうだ?」

低い声が背中にのしかかる。赤いジャージがトレードマークの体育教師、佐原先生だ。あだ名は確か、戦隊レッド。

「先生。こんにちは」

「今日も爽やかだな。さすが、史上二例目の女生徒会長」

「やめてください。私もよりも適任な人なんて、山ほどいますよ」

「相変わらず謙虚だな。今期の生徒会は歴代最大戦力だっていうじゃないか。期待してるよ」

先生は私の肩を叩いて、満足そうに体育館の方へと歩いて行った。先生の後姿が曲がり角に消えて、足音も次第に薄れていく。風の音が大きくなっていく。私に対する期待が音になったみたいだ。この状況を、私を含めた多くの人は苦痛に感じるだろう。あの凌空でさえも、それが嫌で会長にならなかった。私に無いものを持っている人、真逆の発想を持つ人に出会えたら、考えたこともない世界を教えてもらえるのだろうか。

ぼーっと窓を眺めていた。時計を見ると、授業開始三分前。急いで廊下を引き返す。次の授業の先生はいつも五分前には教室に入っている。慌てて教室に戻ってきて授業の準備を始める私を見たらどう思うだろうか。友達にはトイレに行くと言って出てきてしまったが、こんなに時間が経った後でどんな言い訳ができるだろうか。脳内は混乱して、運動量に見合わない汗が噴き出してくる。情けない足音が廊下に響く。廊下は静かに歩きましょう、というお利巧さんな台詞はもう言えないと思った。

階段を駆け上がる。これだけ静かなら、次の授業で一階を利用するクラスはないのだろうと思っていたが、誰かが横を通り過ぎた。振り返ると、知らない女子生徒が一人、ゆっくりと、落ち着いた様子で階段を下りていく。私の目は彼女の纏う得体のしれない何かに魅了されて身動きが取れなくなる。私が足を止めたのに気が付いたのか、女子生徒も最後の段を降りると振り返った。目が合った一瞬、私の予感が的中するように、電流のようなものが全身を駆け巡り、痛いほどに鳥肌が立ったのを感じた。その子はすぐに去って

いったが、私の鳥肌は消えなかった。

続きは電子版へ
⇩

▼▼チームミルスケール

あとがきのようなもの

著者　ギア比４：１

阿賀北ノベルジャム２０２１に参加してみての感想、それは……楽しかったです！

なんて書くと「小学生の作文かよ！」という読者の皆様からのツッコミが聞こえてきそうですが……。いや、小学生だってもっとマシな感想文を書くか……。でも、マジで楽しかったです！

編集の方に自分の書いた小説を見てもらうのなんて初めての経験でしたし、沢山のクリエイターの方と触れ合えたのもとても楽しかったです。今までずっと孤独に創作していたので……。上手い方っていっぱいいるんだなーと今更ながら思い知りまして、よい刺激になりました。また、小説ってこんなふうに書くんだなーっと様々な発見がありました。プロットの作り方とかセリフの書き方とか、キャラクターに奥行きを出す方法とか細かいテクニックまで教えて頂き非常に勉強になりました。今後の創作活動にぜひ役立てたいと思います。あと、締め切り直前に大慌てで加筆修正したのも今となっては良い思い出です。

実は、前年度の阿賀北ノベルジャム２０２０の頃からイベントの存在を知ってはいたんですよ。けど、マトモに小説を書いたことすらない自分が果たして参加してもいいのだろうか……？　なんてことをうじうじ考えて、結局参加しなかったんですよね。で、２０２１年も開催されると知って、まあ悩んだんですけど「えい！」と思い切って参加してみることにしたんです。いやはや本当に参加して良かった！　最後には「特別賞」という身に余る賞と賞状まで頂いてしまって、参加者として冥利に尽きるのみです。

最後になりますが、小説家っぽく謝辞を述べてメたいと思います。本イベントを企画、運営して頂いた実行委員の皆様、「オン・ユア・マークス」に特別賞を下さった審査員の皆様、チームミルスケールの皆様、この本を読んで下さった皆様に最大級の感謝を捧げたいと思います。ありがとうございました！

著者　刀木

私は、阿賀北ノベルジャムのことを大学の図書館で知ってはいたものの、元々は参加するつもりはありませんでした。著者再募集のメールを見て、初めて、参加してみようと思いました。小説を書くことにも不慣れでしたが、それよりも、不器用な私が学業と両立させることができるのか不安でした。ただでさえ、教職課程の授業について行くので精一杯なことに加えて、テストやレポートにも追われる毎日だったので、参加させていただくことになった後も「本当

に大丈夫かな?」とずっとびくびくしていました。案の定、締め切りギリギリに急いで書くことになり、徹夜もしました。毎日少しでも書くというルールも破ってしまいましたし、物語もありきたりなものになってしまいましたが、私個人の感想としては、とても楽しかったです。

小説をルールに従って、順序を辿って、しっかり書くということ自体が初体験で、とても刺激的でした。編集をして下さった波野さんに手取り足取り教えていただき、伊藤さんに表紙を描いていただいて、なんとか一つの作品を完成させることができました。普段何気なく小説を読んでいる中では気が付かなかった部分が、著者の側になって見えてきて不思議な感覚になりました。これから小説を読む上で注意して読みたいと思えるポイントをいくつか見つけられたことも良かったです。その中でも、登場人物たちをどのような視点で描いているのかに着目すると、小説の読み方が変わったなと感じています。

また、家族の反応を見るのも面白かったです。小説が完成した時もとても喜んでくれましたが、自宅にビールが届いた時の喜び、湧きあがった熱は半端なものではなかったです。以前から家族が飲みたいけど手に入らないと嘆いていた幻のビールだったので、とても嬉しそうでした。小説を書けたことも嬉しかったですが、このように家族が喜んでいる顔を見られたことも含めて、この企画に応募してみて良かったなと感じています。

ミルスケールの皆さんをはじめ、阿賀北ノベルジャムの関係者の皆さんには感謝してもしきれません。貴重な経験を、本当にありがとうございました。

デザイナー　伊藤柊果

初めまして、こんにちは。デザイナーの伊藤です。この度はギア比４：１さんの「オン・ユア・マークス」と、刀木さんの「この距離を噛みたい」の表紙を担当させていただきました。阿賀北ノベルジャム２０２０から、阿賀北ノベルジャム２０２１の参加者募集まで、運営として細々とイベントに参加していたのですが、松本先生の後押しもあり、参加者側として参加させていただきました。デザイナーとして、小説が作り上げられる過程を間近で見守るだけでなく、運営側として綾崎隼先生に質問させていただくなど、いいとこどりの得難い体験をさせていただきました。

デザイナーとしての活動で一番苦労したことは、運営さんから８００字の感想を書くようにお願いされているこの現状ですね。感想文が一番の苦になるくらい、デザイナーの仕事は終始楽しいものでした。一番楽しかったのは、「オン・ユア・マークス」の背景を描いたことです。私は阿賀北に建てられた敬和学園大学に通っており、大学のゼミ活動で新発田市の名所を巡ったことがあります。この時、「オン・ユア・マークス」作中に登場した「清水園」に行ったり、「新発田城」を見学したりしたのですが、どこも自然にあふれていて創作意欲の掻き立てられる風景でした。その経験が「オン・ユア・マークス」の郷を思わせる背景につながったのだと思い

ます。また、キャラクターのイメージを共有する工程も楽しかったです。作品を読み込み、登場人物とともに一喜一憂しながらキャラクターデザインを考えるのはワクワクする作業でした。拙い画力でしたが、チームの皆様が好反応を示してくださったり、アドバイスをしていただいたりしたことは、貴重な経験でした。

最後になりましたが、チーム「ミルスケール」の著者のギア比4：1さん、刀木さん、編集者の波野さん、また、多大なるサポートをしてくださった運営の方々、デザイン賞に選んでくださった審査員の方々、本当にありがとうございました。そろそろいい文字数なのでこのあたりで筆を擱かせていただきます。ここまで読んでくださり、ありがとうございました。

編集　波野發作

阿賀北ＮＪの参加は二回目となります。昨年担当作品が大賞だったのと、連続出場がぼくだけということで、ディフェンディングチャンピオンとして、実は結構なプレッシャーを感じておりました。少なくとも、担当する著者はなんとしてもゴールまで送り届けなければならないと思っていました。結果、無事に二人とも完成ということで、ぼくの使命はうまくクリアできたのかな、と思っています。

刀木さんは、中盤でピンチはあったのですが、最後に爆発的な執筆力を発揮して、見事に完結させました。その初稿時の完成度が高く、ぼくの出番はあまりなかったですね。少し誤字脱字を洗ったぐらいで、構成は当初打ち合わせどおりにきれいに組み立てられていました。キャラも魅力的で、読者の支持は掴めたのではないでしょうか。

ギア比4：1さんは、ちょうど1万字ぐらいということでハンドリングしやすいボリュームで、だいぶ濃厚にやりとりできました。その過程でずいぶん削らせてしまったところもあったのですが、その最たるものは姉のセリフ。本当はもっと出番もあってたくさんしゃべっていたんですが、ばっさりと出番をなくしてしまいました。砂漠をさまよう人に水を与えなかったらどうなるか。そこにコップ一杯だけ与えたら、どんなに美味そうに飲むんだろう。それが見たくて、最後に少しだけ登場します。いかがでしたでしょうか。著者の思い浮かべるシーンがより濃厚に伝わったのではないでしょうか。

表紙は伊藤さんの素敵なイラストをぼくのほうで表紙のカタチにレイアウトさせてもらいました。やっぱり素材がいいとテンションあがりますね。ばっちりいい感じに仕上がりました。

最高のメンバーで、最高の二冊をリリースすることができました。チームのみんなに感謝したいと思います。チームは解散しても、担当編集はずっと担当編集です。またいつかどこかでお会いしましょう。みなさんの今後の活躍を楽しみにしています。

悪魔が待っている

ハキフンジャハタ

Mが助けを待っている

ハギワラジュンタ

いつの間に寝ていたのだろうか。青い鉄橋を渡る電車の中で僕は目を覚ます。ゴトン、ゴトンという電車の揺れが僕の頭を窓ガラスに強く打ち付けた。

「痛っ」

僕は頭に手をやる。僕の向かいで新聞を読んでいた桂さんが、新聞の上から目だけを僕に覗かせた。

それにしても、どうも僕はこのボックスシートというものに慣れない。二席ずつが向かい合うように配置された席では、自分の足の前に向かいの人（この場合、それは桂さんである）の足があるので、常に膝を直角に曲げていなければならない。また、今の僕らのように三人のグループでこの席に座った場合、大抵残り一席は荷物置き場になる。

もっとも、誰か見知らぬ人がやって来てその席に座ろうとするならば、僕らは当然即座にその荷物をどけて、その人が座れるようにするのだが、果たしてその人の立場に立った場合、見るからに三人組の集団によって残された、しかも荷物が置かれているその一席に座ろうと思うだろうか。僕ならばどんなに疲れている状況であっても、その席は便宜上開いていないものとカウントして、他に席がなければ立っている事を選択するだろう。

つまり、僕にはその残された一席が無駄になっているように思えて気持ち悪いのだ。座席指定でない普通電車において、乗ってくる人の数は理論上無限であるにも関わらず、車内の空間はドアと壁に仕切られた有限であるのだから、座席や空間の無駄は極力省くべきなのである。僕らがこのボックスシートのワンブロックに座る事によって、僕ら自身の体積以上に空間を消費している事に僕は罪悪感を覚えた。

だが、もっとも、結局のところ僕は早朝にトーキョーを出てきた疲れに負けて、そのボックスシートの中でうとうとしていたのだから、僕の罪悪感など取るに足らないものである。

窓ガラスに頭をぶつけた僕を鼻で笑うと桂さんの顔は、再び新聞の向こう側へ消えた。思えば桂さんは、トーキョー駅を出て以来新幹線の中でも、そしてこの電車に乗り換えた後もずっと同じ新聞を読んでいる。どんなに丁寧に読んだとしても、一日の新聞にそれほど読む事があるのか、僕には甚だ疑問だった。全銘柄の株価を下一桁まで全て暗記しそうな勢いである。

「それほどじっくり読んでもらえればこちらも書き甲斐があるってものです」

僕と全く同じ事を考えていたのか、僕の隣の水本記者が言った。

「これも仕事ですから。社会の情勢を知る事が役職決定官にとって一番重要なんです。まあ、それは新聞記者さんも同じでしょうけどね」

新聞紙の向こうで桂さんが答えた。

「なるほど、役職決定官は常に社会情勢に対してアンテナを張っていると…」

水本記者はぶつぶつと呟きながら、メモを取る。
僕がその様子を見ていると水本記者と目が合った。
「ぼ、僕はネットニュース派なんです。」
特に水本記者は何も言わなかったが、なぜか咄嗟に言い訳が僕の口をついた。「あなたは新聞を読んでいませんよね」と言われそうな気がしたので、聞かれる前に答えたつもりだが、役職決定官の仕事についての取材という事で、僕と桂さんに同行する事になったこの同世代の女性新聞記者に対して恰好を付けたのだろうと言われれば、僕に返す言葉はない。
「そうなんですか」
水本記者は僕の言い訳を見透かしたように言って、僕がネットニュース派である事については、特にメモを取る事はなかった。まるで、「今回の取材対象は役職決定官の桂さんであって、見習いである准役職決定官のお前に用はない」とでも言いたげである。僕は少し恥ずかしくなった。
「まあ、世代によって色々ね」
意外にも助け船は新聞紙の向こう側からやって来た。僕は桂さんについて、本当に周りがよく見える人だと常々思う。僕が職業訓練校時代に使っていた教科書の一ページ目には、「全体を的確に把握し、そしてそのバランスをとる」と大きく書かれていたが、まさしく桂さんはそれを体現している。僕が目指すべき偉大な役職決定官の姿である。
僕はその助け舟に飛び乗るように、大きく頷いた。そして、それを見た水本記者は渋々メモの最後に「ネットニュースも可」と付け加えたのだった。

＊

「おめでとうございます。ついに、皆さんのお子さんに役職がつく日がやってきました」
一年に一回の一大イベントをいつも桂さんはこの言葉で始める。シバタ市民文化会館大ホールに集まった、約１０００人の観衆から大きな拍手が巻き起こった。僕はステージ上、桂さんの少し後ろに立って、その光景を眺める。
僕は手元の資料に目をやる。シバタ市でこの一年に生まれ、今日桂さんによって役職が与えられる新生児の数は約６００人。今日の役職授与式はその６００人を半分に分け、午前の部と午後の部で行われる。だから、今この会場にいる新生児は約３００人。そして、その両親、兄姉で収容人数約１０００人の会場は満員になっていた。
桂さんは第一声に続いて、役職の説明に移る。これも、毎回踏む手順である。
「今日、皆さんのお子さんに与えられる役職は、言うなればその子の人生そのものです。来年の春、お子さんが二歳になられたら、皆さんはお子さんをそれぞれの役職になるための職業訓練校に入学させなくてはなりません。そして、そこで専門的な教育がなされ、十五歳になる頃には、必ず社会のために役職をまっとうする立派な社会人になることでしょう」

再び会場から拍手が起こる。今度は指笛も混じった。どの町に行っても、役職授与式はこのような盛り上がりを見せる。皆、自分の子供に役職がつく事を心待ちにしているのだ。

「この制度が導入される以前、つまり昭和の中頃まで人々は常に不安の中で生きていました」

桂さんはここで少し声のトーンを下げた。役職の重要性を説く巧みな話術。盛り上がっていた会場中の意識が、一気に桂さんの話に引き込まれていくようである。まだ、話を理解できるはずもない新生児までが静まり返った。

「人々は将来に怯え、自分の人生がこの先どうなるのか分からないまま日々を過ごしていかなければなりませんでした。これが、どれほど怖い事であったか。それは、現代を生きる我々の想像を絶するものだったでしょう」

桂さんは一つ呼吸を置く。それから、

「しかし！」

と叫んだ。

「そんな時、我々ニホン人は一つの画期的な方法を思いついたのです」

会場の空気が期待へと変わっていく。まるで一本の緻密に計算された舞台を見ているかの様。そして、桂さんはその淀みのない言葉で物語を紡いでいく。

「それが役職制度です。我々には生まれて一年すると役職決定省内のコンピューターによって自動的に割り当てられた役職が与えられます。これによって我々はもう社会の中でどのように行動するべきか、どのように進学し、どのように働けばいいのかを迷う事はなくなりました。そして、今では誰もが社会に貢献する事ができます」

ここで僕は手に大きな箱を抱える。そして、一歩前へ。桂さんの下で准役職決定官として学ぶようになって以降、色々な街で何度も繰り返してきたように。そして、桂さんが紡ぐ話のリズムを乱さぬように。

「この箱の中に皆さんのお子さんの役職が書かれたカードが入っています」

桂さんは大きく手を広げ、僕が持った箱を指す。会場中の視線が僕に、もとい、僕の持っている箱に集中した。

「医者、弁護士、教師、公務員、アスリート、料理人、農家。当然、与えられる役職はそれぞれ違います。しかし、どんな役職が与えられたとしても全く悲観する必要はありません。全ての役職がこの社会を構成するために決して欠けてはならないもので、この役職をまっとうする事で皆さんのお子さんは立派な社会の一員として認められるのです」

桂さんの演説も終盤に入る。

「さあ、ようこそ、新しい社会の仲間たちよ。我々と共に輝かしい国を作りましょう！」

桂さんはそう締めた。

深々とお辞儀をする桂さんに観客は立ち上がって拍手を送った。僕も桂さんに習い頭を下げる。

役職決定官。それは各地を周りながら役職の重要性を人々に説

き、そして、その土地でこの一年に生まれた子供たちに役職を授ける仕事。そして、十六年前、一歳だった僕が両親に抱かれて出席したであろう役職授与式で僕に与えられたカードに書かれていた役職。

＊

顔。それは人の内面を映し出すキャンバス。嬉しい時、悲しい時、楽しい時、つまらない時、そして、怖い時、安心した時。人の心の内は顔を通して表面化する。

「はい、次の方。整理番号砂川連くん。君に与えられる役職は…」

桂さんは僕がもつ箱から「１２０４９」と書かれた封筒を取り出す。桂さんの前で赤ん坊を抱えた砂川夫妻は不安そうな表情でそれを見つめていた。

桂さんの話の後、役職授与式は、メインイベント、役職の授与へと移った。新生児とその両親は事前に配られた整理番号の順番に舞台の前へと呼ばれ、桂さんから役職のカードを渡される。

「消防士！君はみんなを守る立派な消防士になるんだ。危険に遭遇するかも知れないが君は決して逃げてはいけない。誰よりも勇敢な消防士になって下さい」

桂さんは、まだ何を言われているのかも理解していないであろう赤ん坊に微笑む。そして、頭に手を置いた。それから、砂川夫妻へとカードを差し出す。

「息子さんが立派な消防士になれるよう、しっかしと教育してあげて下さい」

そう言われた夫はカードを表彰状かのように恭しく受け取った。いや、そのカードは自らの子供にとって表彰状なんかより、よっぽど重要なものであるのだから当然である。人はそのカードによって社会の一員として認められるのである。そのカードは人間を、その他の動物でない、「人間」たらしめるものであると言えるのだ。

桂さんから「消防士」のカードを受け取った砂川夫妻が自らの席へ戻っていく。

「良かったね。連は消防士になるんだって」

子供をそうやってあやす砂川夫妻の顔に、僕は初めて安心の色を見た。当然、全ての国民にはしっかりとした役職が与えられるのだが、それでも、実際にカードを手にするまでは自分の子供にちゃんと役職がつくのか不安になると言うのが、親心というやつらしい。

僕は会場を見渡す。既に会場の新生児の約半数に役職が与えられていた。パッと一目見れば、その人の子供が役職を与えられる前か、後か直ぐに分かる。右端の扉の前に座っているある家族は緊張の面持ちでこちらをじっと見ている。だが、対照的にあの左の方の三列目に座っている女性に目をやると、彼女はその腕の中で眠る我が子の頭を愛おしそうに撫でていた。

「ああ、あの子はさっき「パティシエ」の役職を与えらていた子だな」

と僕は思い出す。もしかしたら、彼女は帰り道でふと思い立って吸い込まれるようにケーキ屋へと立ち寄り、家族の人数分の小さなケーキを買うかも知れない。そして、今日の夜、夕食の後にその

ケーキを食べながら自分の子供が新たに社会の一員となった事を祝うのだ。今日一日、彼女の顔には幸せの色が浮かび続ける事だろう。

「さあ次の方。整理番号…」

僕がそんな想像をしている間にも、桂さんの役職授与は進行していく。だんだん、桂さんの声も大きくなってきた。どの町の役職授与式でも同じ事だが、出席者の三分の一は一歳児なのだ。時間が長くなれば泣き出す子も増えてくるし、それに伴って子供をあやそうとする親も増えていく。また、緊張から解かれた大人たちは自分の席に戻るとおしゃべりを始める事も多い。だから、桂さんも徐々に声を張る。

騒々しくなってきた会場内は徐々に混沌として来た。立ち上がって会場から出て行く人も増える。

突然、騒がしかった会場が静まり返った。

そして、誰が放ったか会場の中央に一つの赤い風船が昇るのを僕は見た。

「あ…」

僕の視線は真っすぐ天井へと向かって行く風船に引き付けられる。まるで、会場中の時が止まったかのよう。音は止み、人は動きを止め。唯一、動くものは真っ赤な風船。音もなく、風船はゆっくりと天井へと昇る。

パーンと風船が割れた。それから、風船は打ち上げ花火のように粉々に砕け、そしてゆっくりと落ちていく。やがて、風船はその一欠けらでさえ見えなくなった。

時がまた、動き出す。

会場は騒がしいままで、桂さんの役職授与は止まっていなかった。

「今のは……?」

僕の呟きは会場の騒々しさにかき消され、桂さんの耳には届かない。桂さんは僕が持つ箱から「１２０５０」の封筒を取り出した。

「ん?何か言った?」

僕は「風船が…、」と桂さんに言いかけて止める。会場の大人たちに目をやった。天井を見上げている人はいない。僕はひと時、目を閉じて考えてみる。

「いや、何でもありません」

そう答えた僕を桂さんは不思議そうに見つめていたが、やがて

「そう…」

とだけ言って手にした封筒の口を開けた。

「君の役職は物理教師！」

そう告げられた「１２０５０」番の子供の両親の顔に安堵の表情が浮かぶ。

続きは電子版へ

⇩

▼▼▼ 爆撃バッハ。

阿賀北ノベルジャム感想文

ハギワラジュンタ

「おい、お前」

僕の背後で声がした。振り返ると、そこに彼が立っていた。

彼はハギワラジュンタと名乗った。彼によると、彼はここと違う世界から来たらしい。彼の住む世界と僕らの世界はとても似ているが少し違っていて、例えば彼の住む世界では「シバタ市」を「新発田市」と書くそうだ。にわかには信じ難い。

しかも、彼は僕の視点を通してこちらの世界を覗き見る事ができるようで、僕が経験したMに関するあれやこれやを纏めて小説にしてしまったのだと言う。あまりに突拍子もない話なので、少し前の僕なら相手にしなかっただろう。だが、僕は彼の言葉を否定する事ができなかった。何故なら、僕はこれまた突拍子もない話であるMについて知ってしまったのだから。

「で、それに関して何か感想ある?」

彼は訊ねた。

「いや、感想って言っても…。そもそも、信じられるかも微妙だし…」

僕は困惑する。彼が一冊の本を取りだした。

「ほら、ちゃんとお前が見た通りの事が書いてあるだろ」僕は黒い表紙のその本を受け取り、パラパラとめくった。確かに、僕がシバタ市で体験したことについて書かれているようだ。

「で、感想は?」

「何と言うか…、気恥ずかしいような気もするし、気味悪いような気もするし…。これ本当に僕が見た通りの事が書いてあるの?」

僕は訊ねた。何となく、僕は彼に親近感を覚えたのかも知れない。僕にしては珍しく、初対面の彼にため口で話しかけていた。

「まあ、ちょいちょい誤字、脱字があったりはする。それは世界間の通信時に生じるノイズだから仕方ないんだ。今回は体ごとこっちに来ちゃってるから、データ通信量も凄いぞ」

彼は僕が理解できるはずのない事を言った。

「ほら、そうまでして来てるんだから、早く感想くれよ。そうしないと…、あヤバイ、ギガが足りな…」

言葉の途中で、彼の姿は突然消えてしまった。残された僕は呆然と立ち尽くす。

「実験的な創作ができる場所って言うのは貴重だよな…」

僕の手に残された本を見て、何故だかそんな感想が浮かんだ。

コンコンこちら手の鳴る方へ

冬暗オワリ

コンコンこちら手の鳴る方へ

冬暗オワリ

なんでこんなに明るいのだろうと少女・藤田橙子（とうこ）は思った。彼女は今祖母に連れられ、山の麓に来ていた。今は夜。この時間帯はもう真っ暗だ。光を放つものがないのに二人がいる山の麓だけ明るい。小学生の橙子にとってはこの時間帯はもう布団に入ってるためとても眠く感じた。

「ねぇおばあちゃんなんでこんな所まできたん？」

「んー？もうちょっとで分かるから待ってなさい。」

と祖母は微笑み、疑問に答えなかった。

いつもの祖母はよく喋り、明るい。今の祖母は何も話さず、何か真剣な表情を浮かべている。橙子は聞きたいこと、話したいことがあったが祖母のいつもと違う姿を見て口から言葉を出せずにいた。不思議に思いながらそこで静かに待つことにした。しばらくすると足音が聞こえてきた。山から長い行列がぞろぞろとやってきた。大勢の大人が何をしているのだろうと思った。

「嫁入りだよ。」

と祖母は橙子の心の内を読むかのように呟いた。「結婚」に憧れを抱いていた橙子はその単語を聞いて目を輝かせ、凝らした。が、よく見るとそれはヒトではない。

「狐さんの結婚式よ。綺麗でしょう？」

「ひ、人じゃないの？」

「うん。本物の狐さん。」

最初は狐の面を被っているのかと思った。顔だけ狐だが、他は人間の体と見た目が変わらなかったからだ。彼らのことをよく見ると全身毛に覆われ、大きめのつり目の三角形の耳が狐であることを主張していた。

しかし、その行列は人間も身につけるような和装を身にまとっていた。男性は黒紋付織袴、女性は黒留袖。そんな中で目立ったのは唯一正反対の色を身にまとった白無垢姿の花嫁であった。

その姿を見て橙子は息が止まった。それと同時に異質な花嫁姿を美しいと感じてしまった。白無垢姿に赤い化粧を基調にした和風な装い。

「きれい…。」

橙子は無意識にそう呟いた。

「毎年この時期に狐さんたちが結婚式をするのよ。」

と小声で言った。

「うそだ！私初めて見たよ？」

「狐さんたちは隠れて結婚式をしているからね。だから橙子、この事は他の人に言っちゃいけないよ。いいね？」

「うん！わかった！」

その日はとても良い気分で寝れた。

そして橙子はこの出来事を宝箱のようにそっと胸の奥にしまうことにした。

しかし、次の日から橙子の日常は変わってしまった。

人間界に混じって生活する獣たちの姿が見えるようになってしまったのだ。

彼らは人間に化けて生活しているようだった。当初そんな姿を見えてしまい、怖く感じた。橙子が見た彼らは人間を騙すような行為をし、それを嘲笑う姿であった。あの日見た美しい姿とかけ離れていた。とても怖く泣きながら大人に相談したが、大人達は子供の戯言だと思い、信じてくれなかった。唯一信じてくれたのは祖母だった。祖母は橙子の話を優しく聞いてくれ、手を握り、こう言った。

「あなたは間違えてないのよ。いつかあなたのその見える力がきっと役に立つ。だから誇りに思いなさい。」

橙子は信じる事が出来なかった。

こんなただ見えるだけの能力が何の役に立つのか。そして祖母の手を振り払った。

「おばあちゃんのせいだよ！おばあちゃんがあんなとこ連れてったから私おかしくなっちゃったよ。おばあちゃんなんかもう嫌い！」

抱えていた苦しみが怒りに変わってしまった。そして祖母に八つ当たりをしてしまった。

橙子はそれを後悔したが、祖母と距離を置くようになった。祖母が悪いわけじゃないのは分かっていたが、そうしないと彼女は獣がずっと見え続けると思ってしまったのだ。そして橙子が中学に上がる前に祖母は亡くなってしまった。彼女は和解することもできなかった。

そんなキラキラとしたあの夜も彼女の傷と化してしまった。

続きは電子版へ

⇩

▼▼「爆撃バッハ。」

阿賀北ノベルジャム２０２１に参加して

冬暗オワリ

今回初めて小説を書くプロジェクト「ノベルジャム」に参加させて頂いた冬暗です。このプロジェクトに参加したことで私は様々なことが経験でき、成長ができた数ヶ月だったと思います。私は高校生の時に文芸部に所属しており、そこで短めで軽い小説を書いていました。当時の私はもっと小説を勉強したいと思っていましたが、周りに小説を書く人が居なかったためダラダラとこれで良いのかと思い悩みながら小説を書いていました。大学生になり、ノベルジャムという存在を知った私は、ここのプロジェクトに参加したら小説を書く能力値が上がるかもしれないと思い、参加しました。そこで長年小説を書いているハギワラさん、本屋を営んでいる水澤さん、そして同じ大学生のたっつんさんと出会い、私の小説に対する考え方が大きく変わりました。小説、デザイン、編集の垣根を越えてお互いにアドバイスをし合える良い環境でした。私では到底考えることができなかったアドバイスを頂き、なんとか小説を書くことが出来ました。この作品も「爆撃バッハ。」のメンバーだったからこそ出来たものだと思います。メンバーの皆さんに改めて感謝したいです。ありがとうございました。このプロジェクトに参加してやはり自分は文を書くのが好きなんだなと再認識しました。私自身これからも頑張って小説を描き続けたいなと思います。

たっつん

阿賀北ノベルジャムの「爆撃バッハ。」でイラストを担当させて頂きましたたっつんです。今回、初めて参加させていただき、最初は不安だらけでしたが、チームの皆さん、そして運営の皆さんに支えてもらったおかげで、自分の使命は果たせたのではないかと思っています。今回、参加のきっかけとなったのは、ゼミの先生からの紹介です。自分で本当にいいのかとも思いましたが、昔からイラストを描くことが好きだったということや、小説のイラストを担当するという機会はとても貴重なのではないか、と思い、参加しました。しかし、いざ描くとなった時に問題が発生しました。私は絵を描く際、ＰＣ等を使うことができなかったのです。デジタルで絵を描くことが苦手なため、手描きで描くことしかできませんでした。そのため、チームの皆さんが考えていたものをしっかり「絵」として表現できないのではないかと不安でした。しかし、出来上がった小説を読ませていただき、頭にアイディアが色々浮かんできました。そしてみなさんとも色々アイディアを出し合い、自分が想像してもいなかった構図を提案してもらい、構成を決めることができ、小説の

内容を「絵」として表現することができました。この企画に参加させていただき、自分が絵を描くことが好きだということを再認識することができました。今後は絵を描く時間は減ってしまうと思いますが、自分が描きたいものをたくさん描いていきたいと思いました。最後になりますが貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

編集　水澤陽介

阿賀北ノベルジャムに初めて参加してみての感想。初めては記憶に残りやすいといいますが、当時の制作期間を振り返ると怒涛の日々だったと感じます。

「爆撃バッハ。」チームは著者とデザイナー、それぞれが若手で構成されたメンバーでした。「0から企画を考えて3ヶ月間で1つの本に仕上げる」と言うのは簡単、実際に形にするまでに多くの苦労があったはずです。オチに満足できずにプロットから大幅に変更したこと。物語の先が思い浮かばずにペンが止まったこと。著者の思いを表紙に込められずにいたこと……。

挫折してもおかしくない中、阿賀北ノベルジャムは開幕式からスタートしてプロットや初稿、完成稿発表会とモチベーションが下がらないような取り組みに救われたメンバーもいました。（発表会では他のチームが作る本の出来の良さがわかる瞬間だったため、ドキドキヒヤヒヤしたのは忘れられません）

さて、阿賀北ノベルジェムを通して完成した2冊。著者の二人が苦労された分、出来の良し悪し以上にこの期間がご自身の今後の糧につながっていたらうれしい。チームに皆さんには感謝とともにデビューのきっかけがこの場だったなんていわれたら編集の冥利に尽きます。ありがとうございました。

審査員講評

審査委員長　仲俣　暁生

今回のグランプリ作品となった茶山日縁さんの『宵闇の盃』は、明治時代の新発田を舞台とする歴史小説、しかもこれまで描かれることの少なかった陶芸界を舞台とするという意欲的な作品で、たいへんに読み応えがあった。男性優位の世界のなか、女性が表現者として――つまり個人として生きていくことがいかに困難か、創作を続けるには正体を隠さなければならないことが、いかに不当であるか。こうした現代的な問題意識が作品としてみごとに結実していた。個々の登場人物も続編が読みたくなるほどしっかり描き分けられており、これらを総合的に評価し、グランプリ受賞作とした。

ギア比4：1さんの『オン・ユア・マークス』には、地域社会のなかで才能をもてあまし気味のまま鬱屈している若者が、そこから解放されて自分の人生のスタートラインの「位置に付く」までが描かれている。爽やかで忘れがたい印象を残す作品であるという意見が出たため、協議の結果、特別賞を与えることにした。

その他の作品についても、一言ずつ触れる。

ハギワラジュンタさんの『Mが助けを待っている』は、その国に住む者の職業が「役職決定官」によって決めら

――プロフィール――

仲俣暁生（なかまたあきお）編集者、文筆家。大正大学表現学部教授。「マガジン航」編集発行人。著書：『失われた「文学」を求めて【文芸時評編】』（つかだま書房）、『極西文学論』（晶文社）、『ポスト・ムラカミの日本文学』（朝日出版社）、『再起動せよと雑誌はいう』（京阪神エルマガジン社）ほか。

れてしまう、というディストピア的な未来社会を舞台にした物語。サスペンスと叙情性を兼ね備えた、かつてのＮＨＫの「少年ドラマシリーズ」を思わせる作風は、新鮮であると同時にどこか懐かしさを感じさせてくれた。

米田淳一さんの『あがのあねさま』は、ＳＤＧｓという目標を達成できずにいる近未来社会を舞台に、若い女性のかたちをした「巡洋艦」の三姉妹が大活躍する物語。難しい社会問題を扱いつつも娯楽作品として十分に成立しており、今回の完成作のなかで最も長いにもかかわらず、一気に読んでしまった。巻末付録の新発田への取材旅行記もじつに秀逸だった。

刀木さんの『この距離を噛みたい』は、高校の校庭に巨大な歯が生えてくる、という意表をついた設定が卓抜で、「学園で代々受け継がれてきた奇妙な伝統」という、それ自体はすでにジャンル化している形式を採用していながら、十分に面白さを感じることができた。

冬暗オワリさんの『コンコンこちら手の鳴る方へ』は「狐の嫁入り」という民俗学的なモチーフによって、人間と狐との交情を描いた物語に、独特の肌触りが感じられてよかった。

「姉」という共通テーマのもと、それぞれに手法もジャンルも多種多様で個性的な6作品が完成したことを、審査委員長としてたいへんに喜ばしく思う。

審査員講評

審査員　間狩　隆充

――プロフィール――

１９６４年生まれ。新潟日報社新発田総局長・編集局次長職・論説編集委員。
早稲田大学社会科学部卒業後、１９８８年新潟日報社入社。
新井支局長、佐渡支局長、整理部長、報道部特設・統合編集担当部長、新発田総局長を歴任。

昨年の第一回に続き審査させていただきました。審査したと言うよりは、６作品を充分に楽しませていただきました。まずは、著者をはじめとした作品の制作に関わった人たちや、ノベルジャムの運営に取り組んだ人たちの労をねぎらい、感謝を申し上げます。

６作品とも阿賀北地域が舞台の小説だとは分かっているのですが、普段目にする場所や風景が、小説に登場すると嬉しく感じますし、小説になると違った場所のように感じることもでき、小説の持つ魅力というものを、つくづく実感しました。

最近は、どこの自治体も我が町わが村のＰＲに必死になっています。そんな中、２年間審査して思ったのですが、ノベルジャムという手法は、地域ＰＲや地域おこしの方法として優れたものではないかと、感じています。まず、参加者が小説を書くためにその地域のことを勉強します、これは地域を知り郷土愛にもつながることだと思います。そして活字になり販売されると、その地域のことが多くの人の目に触れます。万一、映画化され人気が出れば、その映画の聖地として多くの人が訪れるでしょう。

また、今回の著者の中にもいらっしゃいましたが、小説を書くための下調べでいらっしゃることで、入り込み客が増えます。今年は福井県でも絵本ジャムを始めたと聞きました。自治体でもノベルジャムを開催してみたらどうでしょうか。予算に見合う効果はあると思います。

作品の感想を簡単に述べさせていただきます。

グランプリを受賞した「宵闇の盃」は、他の作品とは違う感じをいだきました。簡単に言うと、ライトノベルとは違った感じ、言うならば純文学と言っていいほどの感触を受けました。それは、時代設定が明治時代だとのこともあるのですが、1行1行の文章からひしひしと感じられましたし、また、陶芸を選んだことも、その要因だと思います。私はこの作者が若い女性だと以前から知っていましたので、え、ホントにと、若いのに渋いテーマを選んだことに驚きましたし、陶芸についても経験があるのかなと思ったほどでした。他にも、使っている表現や言い回しなども、ベテランの人が書いているのではと錯覚する程でした。

小説の中で、主人公が絶望して雪の中で倒れていた時に、助けに来た弟とのシーンは、この小説のクライマックスだと私は思っており、弟の告白でこれまでのこだわりが解消されたように思え、泣けるシーンでした。読後感もすっきりしてすがすがしく、全体としても小説としての完成度は高いかなと評価しております。

注文をつけさせてもらえるなら、地域の魅力発信の点で、新発田発祥とも言われるから寿司や、明治時代という設定のため陸軍歩兵16連隊は出てきましたが、陶芸を扱っているので、新発田藩時代から続いていた小坂焼のことや、お茶の石州流になどにも触れて、地域の歴史をもう少し紹介して欲しかったです。

さらに贅沢を言わせていただけるのなら、時おり主人公というか主語が弟に代わるのはどうなのだろう。確かに

そうすることによって、話の展開を分かりやすくしていますが、千代の成長の物語として全部千代で通した方がいいのかとも思いました。また、この小説は、男性中心社会に対する女性の挑戦をテーマにしていますが、単なる暴力行為に及んでの妨害だけでなく、社会の男尊女卑の雰囲気も描き、それに負けじと頑張っていく主人公の成長していく姿にしてもよかったのではないのか。絶望から奮起して、最終章で個展を開くまで、あるいは個展を開いた後からの、社会の偏見や差別にどう戦って成長していくかを描いてほしかったようにも感じました。

まあ、そうはいっても3カ月という制作時間の問題もあるし、なんと言っても作者はまだ若いですので、今後の健筆にも大いに期待したいです。

私の好みにあった作品は「Mが助けを待っている」でした。本来の自分、自分自身を殺すというのは、現代の管理社会や閉塞した社会に生きなければならない人たちを表しているとも理解でき、現代社会をするどく風刺している作品だと高く評価しました。ミステリー的な要素もあり、面白く読ませてもらいました。

Mが座っていた交番近くのキノコのようなモニュメントには、私も新発田へ来て、これは何だかな?と気になっていたので、よくここを取り上げてくれたという、うれしい感想もあります。他所から来た人がコメや村上の鮭をおいしがるというPRのやり方に新鮮さも感じました。

ミステリーという点では「この距離を噛みたい」も面白かったです。ある意味で主役とも言える歯はいったい何を指しているのか、それぞれの読者が考え想像できる余地を与えているととれました。ただ、展開が安易だと思える箇所もありました。生徒会長の熊倉さんが兎村を下の歯が見える人だと断定した所や、最後の生徒会長が歯について理解できた点、兎村さんを生徒会長にしたくなった気持ちが、なぜしたくなったのか気持ちの変遷がよく分か

らなかった。小説の肝心な部分なだけに、もうちょっと言葉を尽くしてほしかったです。

「オン・ユア・マークス」は、「え、これから」というところで終わってしまい、もっと先を読みたかったです。他の短編を書いた余裕があるのだから、その力でオン・ユア・マークスに力を注いでほしかった思いが強いです。現代風らしく、ラインの会話がよく出てくるが、「ふうん」などの言葉をラインでわざわざ送るのだろうか。そこは少し疑問に思えました。個人的には「弔い」や「鈍の幸福」の方が面白かったです。

「コンコンこちら手の鳴る方へ」は、阿賀町の狐の嫁入り行列から、の案だと思います。ただ、小説の舞台が阿賀町なのか読んでいてよく分からなかったです。もっとどこの地域なのか分かるように描いてほしかったです。

「あがのあねさま」は長作だけに読み応えがありました。現在のＳＤＧＳや環境保全対策について、長々と批判している点は作者の熱い思いが感じ取ることもできました。２０２９年の設定で、７年後。最初は７年先にこんなＡＩロボットができるのかなと、いくら小説でもちょっと無理があるのではと思いましたが、姉妹ロボットは未来から来たのだと分かり、納得。作者のうまさを感じました。新幹線が新潟空港まで伸びている点などは、新潟のことをよく取材して勉強したのだなと思いました。巻末に書かれていたように、新発田をもっとＰＲしていただければ嬉しいです。

最後に、第３回、第４回と、阿賀北ノベルジャムがこれからも続いていき、多くの作品が誕生することを期待しております。

審査員講評

審査員　鈴木美和子

――プロフィール――
敬和学園大学非常勤講師
1976年　大学卒業後渡英。ロンドンの公立大学で英語を学ぶ。
1976年　ロンドン日本人学校講師
1979年〜2013年　県立高校教諭
2014年〜　県立高校、敬和学園大学、新潟リハビリテーション大学等、非常勤講師

3月19日のグランプリ授賞式で私の阿賀北ノベルジャムも終わり、初めてノベルジャムとはこういうものだったのかということを理解したのです。何事も初めてのこととは手さぐりで進んでいくのでしょうが、このたびはまず松本先生の車に乗せていただき、みなさんの助けで役割を果たしながら目的地にたどり着いたという感じです。生来文学的素養に乏しく、小説も読まない私には審査員など考えられないことなのですが、唯一阿賀北の生まれ育ちという点でお役に立てればと心を決めました。

しかし、ノベルジャムのコンセプトを理解することは困難でした。小説は個人の精神的いとなみから生み出されるものと思っていたものですから、チームで短期間に作り上げ、セールスまでするという手法は驚きでした。誰がリーダーになるのだろう?チームの化学反応で作品が生まれるのだろうか?色々の不思議の中で日々を過ごしました。

役割としてまず大きな厚紙で座標軸をつくり、たての軸に「阿賀北らしさ」よこの軸に「映画化できるか」としました。映画にして外国の人々に理解してもらえるかという視点です。

お題の「姉」について少し触れさせていただきます。農村地帯の阿賀北では昔から母親の労働力が不可欠のため、子守をする人が必要でした。そこで長女が弟妹の世話をする事は当たり前で、その中で長女は家族内での実力を付けていったのです。そして長男の嫁となりやがて家政の中心となります。そのような立場で経験される思いや悩みや考え方をもつ女性像をイメージしていただくことを願っておりました。

では、あいうえお順に各作品についてコメントさせていただきます。

「あがのあねさま」

題と内容のギャップにお題を大切にして下さったことがわかります。新発田が軍都であることをふまえよく調べられています。作者の問題意識と豊かな知識に圧倒されました。アニメになるとすばらしいと思います。ロボットの心は3人称で表現されたらよかったのではと個人的には思います。全作品中最大のボリュームに表現者としてのエネルギーがあふれています。

「Mが助けを待っている」

赤い風船のイメージが焼き付いています。「役職決定官」という発想にはショックを受けました。キャリア教育を担当してきたものにはいろいろ考えさせられる作品です。ジョージ・オーウェルやカフカを思い出させる普遍性があります。深いテーマです。

「オン・ユア・マークス」

まず題の良さにひかれました。お題に沿って無理なく仕上げられました。表紙の通りある種のさわやかな風が吹いているようです。決定的なのは、父親の存在感のなさです。彼の言葉がないのです。この点に私独自の阿賀北感が重なります。長年この地域のコミュニケーション力の低さについて考えてまいりました。一家の大黒柱である父親たちは多くを語りません。この作品を映画化したら、父親の出番はワンシーンで言葉もほとんどないでしょう。阿賀北の香りのする作品でした。

「この距離を噛みたい」

この舞台は県立中条高校でしょう。よくぞ書いてくださいました。学校と町がよく描写され、地元への愛情が伝わってきます。女子の大活躍には、城下町ではなかったこの土地の自由な空気が感じられます。未来への希望があります。作者のイマジネーション力にはなかなかついていけず、くり返し読み、ある意味で鍛えられました。高校生の演劇になるとおもしろいかもしれません。

「コンコンこちら手の鳴る方へ」

いかにも津川の物語です。地元の方が知ったらどんなによろこばれることでしょう。テーマの姉に合わせるために努力をされたと感じます。美しい自然をバックに映画化されたらすばらしいです。そのためにも作品のボリュームを大きくされたらよいと思います。見えない世界と人間のやり取りという、大切なテーマを秘めています。

「宵闇の盃」

最も文芸作品の香りがする美しい作品です。手触りのよい布に触れているようです。少し時代設定に合わない表現が見られる点は残念です。まず前もってストーリーがあって、それからテーマに合わせる努力をなさったように感じられました。すばらしいです。欲を言えば阿賀北の土にこだわり、さらに茶道の石川流を大切にされた藩主溝口家も取り上げられたら地元に根を下ろした作品になります。

最後に全作品に取り上げられなかったもので定説なテーマがありますことを記させてください。大自然、日本海、農業と豪農の歴史、明治時代からの果物生産、文人が歩いた浜の道、教会、中央で活躍した大勢の人々等。

ありがとうございました。

審査員講評

デザイン審査員　加藤　雅一

第2回目となる阿賀北ノベルジャム。今年もオンラインによる創作活動で魅力的な作品が生まれました。今年のテーマは、ＳＤＧｓの達成目標の１つであるジェンダー平等から派生して「姉」。テーマを聞いた瞬間に思ったのは「具体と抽象」どちらに振って解釈するかでした。「姉妹」の姉と捉えるか、また広く「女性」という解釈で捉えるのか。表紙デザインにおいてもどの程度、直接的あるいは間接的に表現するのか一つの関心でした。

「デザイン賞」の審査ということで、どのような点をジャッジしたかをお話します。まず第一回からの継続した視点として、意識すべきは作品発表の場所がＢＣＣＫＳという電子書籍サイトで販売するということです。加えて一部、紙の書籍も書店に置かせていただきました。つまり無料配布するわけではなく有料販売することが、この阿賀北ノベルジャムの特徴のひとつでもあるわけです。となると表紙周りのデザインにおいては「アート性」よりも「商業デザイン的役割」が果たせているかポイントとなってきます。ここをデザインの基軸とさせて頂きました。アートとデザインの定義についてはさまざまありますが「アートは問題提起」「デザインは問題解決」と言われる

── プロフィール ──

㈱テクスファーム　取締役社長／クリエイティブディレクター。
２００２年創刊のフリーペーパー『新潟美少女図鑑』は全国へ展開し、二階堂ふみ、桜井日奈子、馬場ふみか、など多くの女優・モデルが発掘される。全国展開以降はノウハウを活かし、広報コンサルや広告デザインなど、クライアントワークに力をいれている。手掛ける仕事は、教育機関・行政・アパレル・美容業・タレントなど。１９７７年新潟市生まれ。

ことがあります。内なる思いの表現か、売るという目的達成のための手段かの違いです。

・作品への想像力を掻き立てるものになっているか。

・この価格でこの質なら買ってみたい、と思わせるクオリティ担保に貢献しているか。

・魅力を伝える工夫や仕掛けなどが凝らされているか。（ただし、騙したり煽ったりという仕掛けではないこと）

・ものがたりの世界観を表現するものになっているか、です。最後のポイントは著者／編集者／デザイナーがチームで作り上げ「共創」ができているかというところに起因するかと思います。

作品を読んでみると面白い作品がたくさんありました。ジャッジに影響を受けてしまうので、デザイン賞は、あえて作品本編の面白さとは少し切り離して審査することにしました。

全作品の中で「デザイン賞」に選ばせていただいのがこちらの作品について少しコメントさせて頂きます。

チームミルスケール

『オン・ユア・マークス』

著者：ギア比４：１

編集：波野發作

デザイン：伊藤柊果（イラスト）

今回６作品の書籍を並べた際、一番初めに手が伸びました。青空と入道雲のコントラスト、空を仰ぐ主人公、突

き抜ける飛行機雲。初見でディテールをまじまじと見たわけではありませんが、パッと並んだ表紙を見た印象として、この作品の奥行き感、ヌケ感のあるイラストに引き込まれ、また同時に「良い読後感が得られそうだな」という期待感が湧きました。表紙デザインの大切な役割である「デザインが、ものがたり（作品）への想像力を掻き立てる」という点において、一番効果的だったと思います。

後出しになりますが、制作意図を聞いて納得。随所に緻密な計算が施されていることがよく分かりました。チームからの解説をそのままご紹介します。

（以下引用）

～本作の表紙には主人公の「姉」を中央にあしらい、主人公目線の物語であることを示唆。阿賀北の豊かな自然を感じさせる草原と広い空（入道雲）を背景にしている。上空には主人公たちが立つべきスタートラインを連想させる飛行機雲を描き、物語の主題を表した。青と白を中心に地側に緑と茶と配置して視覚的な安定感をもたせるように試みた。タイトルは電子書籍でのアイコン表示を意識して級数を上げつつも、イラストへの干渉を抑えるためにウェイトの低い書体を採用した。帯部分はグラシン紙のような素材をイメージして半透明にし、物語の核となるキーワードとストーリー骨子を配置。左隅にはチームアイコンを配した。背表紙はチーム共通で、文庫シリーズ的なシンプルなものに。裏表紙には、表紙の姉ではなく、主人公である弟に入れ替えたイラストを配置して、気づけば面白いという遊びを仕込んでいる。～

（引用ここまで）

チームミルスケール『オン・ユア・マークス』、デザインを担当された伊藤柊果さん、おめでとうございます。同じチームである、著者のギア比4：1さん、編集の波野發作さんも、おめでとうございます。

「デザイン」の意味を説明する際によく「設計」と言い換えることがありますが、まさに細部まで設計されているからこそ、表紙全体としての効果的でよい働きをしてくれているのだと思います。今後の活躍がますます楽しみです。阿賀北ノベルジャムへのまたの参加を楽しみにしています。来年もまた素晴らしい作品にあえることを楽しみにしております。

審査員講評

PR販促審査員　渡辺　安之

弊社が協賛をしていました前身イベントである「阿賀北ロマン賞」の時から関りを持たせていただいてました。私自身、読むこと自体専ら携帯で情報収集をしていて、仕事柄ビジネス書を読み漁ってはいますが、小説を読むことは皆無に等しいくらい読んでおりません。

葬儀社を経営しながら観光施設の運営と観光地でクラフトビール醸造・販売をし、地域密着で活動しているため阿賀北ノベルジャムにマーケティングの分野でご依頼があったことをとても嬉しく思います。

近年、「ローカル」がキーワードで日本各地で地域の魅力が発信されていますが、ノベルジャムでは地域への深い愛着や理解を深める新たなスタイルの発信と捉えております。

若年層をターゲットにはネット発信かつデータ本で購入できることが重要なのは言うまでもありませんが、まだ紙媒体で読む層が多いのでしっかりと手に取って読むことができる紙本で販売されているのも重要なポイントです。

――プロフィール――

株式会社花安新発田斎場　常務取締役
玉川大学卒業後、高校教師とギフト卸売販売営業職に従事。その後に帰郷し15代続く花安の家業「株式会社花安新発田斎場」を継ぐ。同企業内で地域加盟店事業や樹木葬霊園など関連事業を複数立上げ。現在、新発田市内で葬祭ホール6式場、樹木葬霊園運営、観光施設（新発田市指定管理）運営。昨年、月岡温泉にクラフトビール醸造所「TSUKIOKA BREWERY」を立ち上げるなど、様々な地域事業に携わる。日本バレーボール協会準指導員、経営学修士課程修了（MBA）

今回はコロナ禍で阿賀北ノベルジャムのイベント自体が活動しづらいということもありましたが、その中でも三米茶文庫さんがリアル店舗で紙本のＰＲと販売をされていたのが印象的です。広告宣伝の効果として幅広いターゲットに需要を喚起できるのは紙媒体だからこそと考えられます。

主観的な話になりますが、実際に「あがのあねさま」を手に取って中をざっと見たときに、どこかで見たことある風景が小説の要所に写真が挿入されていました。読む前に自分が住む町が小説の舞台になっていることを実感した瞬間でした。作者が自分の住む町のどこを辿ってどんな想いで小説を作り上げていったかが作品最後の編集後記で記されていたのも、地域に住む私にとって勝手に嬉しくなってしまうポイントでした。こういったものもファンの「聖地巡礼」には欠かせない項目です。

三米茶文庫さんのＳＮＳの投稿の手数が非常に多かったことも良かった点です。ＳＮＳの種類では不特定多数の拡散力が高くアクティブユーザーが一番多いTwitterを中心に、情報の流れが速い時代の中で、攻撃は最大の防御で兎にも角にも攻める印象が強かったです。戦略的にＳＮＳマーケティングを行う企業に引けを取らない頻度でのＳＮＳ投稿でした。

また、Twitterと同時並行でnoteでも発信していたのも効果的と考えられます。noteではTwitterと同じことを投稿するのではなく、グッズを開発中心にそれぞれのＳＮＳの特徴を生かして使い分けられていたと感じます。企画力も高く、連続グッズ化企画として、小説キャラのアクリルフィギュアや缶バッチ、Ｔシャツの開発販売と三米茶文庫ブランドや作品を側面から後押し魅力付けしています。Twitterによる見込み客へのアプローチからnoteでコ

アなファンへの訴求も複数のＳＮＳ活用のメリットです。

参加者の作品と取り組みに甲乙はつけがたいのですが、顧客に商材を認知して購入してもらうまでのマーケティング活動の観点から読み解くと、全く小説を読んだことない方へのタッチポイントが多く、かつファンの心をくすぐる要素まで詰め込んである三米茶文庫さんの取り組みは今後の阿賀北ノベルジャム参加者のマーケティング活動の手がかりになるかもしれません。

阿賀北ノベルジャム2021学生リーダーの一野諒也です。
皆さんにとって阿賀北ノベルジャムはどのようなモノだったでしょうか
皆さんへ言葉には言い表すことができないモノを共有する機会となれれば
幸いです　阿賀北ノベルジャムの光輝かしい未来に Prosit!!

コロナが少しだけ収まり、前よりも活動回数が増えて、とても楽しかったです。阿賀北から、素晴らしい小説家が生まれて、良かったです。これからも応援しています。
本間

このイベントに参加することで得られたものの1つに、外部の方との連絡経験があると思います。阿賀北ノベルジャムでは社会人の方とやりとりする機会がありましたが、それに今までの学生生活には無いものでした。阿賀北ノベルジャムは貴重な財産だと心から言えます。ありがとうございました。
三浦

阿賀北ノベルジャム2021では、イベントの司会役という貴重な機会を頂けたこと、また運営側として参加者の皆様が作品を創り出していく過程に少しでも携われたことを嬉しく思っています。
金安

普段は本を読まない人間なので本を読むきっかけやイベントに参加する機会を頂けてとても楽しくやらせてもらいました。ありがとうございます！
諏訪佐

阿賀北ノベルジャムではゼミではないイベントに初めて参加させていただきました。自分の中では今回のイベントに参加をしたというよりも自主性の発揮につながったと思うので阿賀北ノベルジャムという企画にとても感謝しております。
速水

コロナ禍ということで多くのイベントがオンラインでの開催となりましたが、オンラインだからこそ新たな層にノベルジャムを知っていただけたのではないかと思います。SNS担当として少しでもお役に立てていたら幸いです。
山下

■阿賀北ノベルジャム実行委員会運営メンバー

阿賀北ノベルジャム実行委員長　松本　　淳

阿賀北ノベルジャム実行委員会学生リーダー　一野　諒也

本間　俊介

金安　優希

諏佐　恵太

速水　良太

三浦　王暉

山下　美冬

山城　美咲

萬歳　淳一

地域連携センター委員長　富川　　尚

阿賀北ノベルジャム2021
アーカイブ・ガイドブック
～阿賀北への招待状～

2022年９月30日	初版第１刷　発行	
	『宵闇の盃』	茶山日縁
	『あがのあねさま』	米田淳一
	『オン・ユア・マークス』	ギア比４：１
	『この距離を噛みたい』	刀木
	『Mが助けを待っている』	ハギワラジュンタ
	『コンコンこちら手の鳴る方へ』	冬暗オワリ
発　行　所	阿賀北ノベルジャム実行委員会	

阿賀北ノベルジャム ONLINE

© 阿賀北ノベルジャム実行委員会／伊藤 柊果（表紙イラスト）
禁無断転載複製